西野々古墳群・外子遺跡・
西野々遺跡発掘調査概要

―府営農村総合整備事業「伏見堂地区」に伴う試掘・確認・発掘調査―

令和４年３月

大阪府教育委員会

西野々古墳群・外子遺跡・西野々遺跡発掘調査概要

二〇二二年三月

大阪府教育委員会

序文

本書で報告します西野々古墳群、外子遺跡、西野々遺跡は、富田林市伏見堂に所在する縄文時代から中世にかけての遺跡です。

大阪府では、府営農村総合整備事業「伏見堂地区」の計画を受け、試掘・確認調査を令和元年度より実施してきました。令和元年度の調査では、西野々古墳群で古墳の周溝を確認、外子遺跡で古墳の石室などを確認しました。また西野々古墳群の隣接地で中世の遺構・遺物が確認されたことから、新たな埋蔵文化財包蔵地として西野々遺跡が周知されました。

令和２年度の調査では、西野々遺跡で中世の掘立柱建物やそれに伴う遺物などが出土し、外子遺跡でも中世の遺物が出土しました。これらの成果は、これまでの当地周辺の調査成果に新たな知見を加えるもので、この地域の歴史を解明していくうえで、重要な指標となるものです。

調査の実施にあたりましては、地元関係者ならびに富田林市教育委員会、大阪府環境農林水産部の方々に、多大なご理解とご協力をいただきましたことを深く感謝いたします。

本府教育委員会では文化財の調査や保護、活用などの事業をさらに推進してまいります。今後ともいっそうのご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

令和４年３月

大阪府教育庁文化財保護課長

稲田　信彦

例言

1．本書は、大阪府教育委員会が大阪府環境農林水産部の依頼を受けて令和元年度から令和２年度に実施した、府営農村総合整備事業「伏見堂地区」に伴う、富田林市伏見堂所在の西野々古墳群・外子遺跡・西野々遺跡の試掘・確認・発掘調査報告書である。

2．試掘･確認調査は文化財保護課調査事業グループ主査　関真一、副主査　木村啓章、技師　大澤嶺、発掘調査は大澤を担当者として実施した。

3．遺物整理は、文化財保護課調査管理グループ専門員　藤田道子を担当者として実施した。

4．令和元年度試掘・確認調査の調査番号は 19025、令和２年度確認調査の調査番号は 20024、発掘調査の調査番号は 20017 である。

5．本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が行い､図版４の遺跡遠景及び遺物写真は､イトーフォトに委託した。

6．土坑埋土の水洗篩分・年代測定については、株式会社パレオ・ラボに委託し、その成果を第５章に掲載した。また令和元年度出土耳環については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、保存処理を行った。

7．本書の執筆及び編集は、大澤と木村が行った。

9．発掘調査の出土遺物や写真・図面等の記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。

10. 発掘調査・遺物整理にあたっては、以下の方々よりご指導・ご教示・ご協力いただきました。
　富田林市教育委員会、南河内農と緑の総合事務所、伏見堂自治会（順不同）

11. 発掘調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した費用は、大阪府環境農林水産部及び教育庁が負担した。

凡例

1．本書で用いる座標値は世界測地系（国土地理座標第Ⅵ系）に基づき、方位針は座標北を示す。水準値は T.P. 値（東京湾平均海面）を用い、本文および挿図中では T.P. ＋○mと表記する。

2．遺構番号は、遺構の種類に関係なく、検出した順に付している。これは発掘調査での記録と合致する。また、掲載遺物に付した番号は通し番号で、挿図と図版の番号は一致している。

3．土層および遺物の色調については、『新版 標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 /2006 年度版）に拠る。

4．遺物実測図の断面は、須恵器・陶器・磁器を黒塗り、瓦器・瓦質土器を網伏せとし、その他を白抜きとした。

5．引用・参考文献は第６章については章末に記し、その他は巻末に一括した。

本文目次

序文
例言
凡例
第１章　調査に至る経緯と経過 1
　第１節　調査の経緯 1
　第２節　調査の経過と方法 1
第２章　地理的環境と歴史的環境 4
　第１節　地理的環境 4
　第２節　歴史的環境 4
第３章　試掘・確認調査 7
　第１節　令和元年度調査 7
　第２節　令和２年度調査 18
第４章　発掘調査の調査成果 20
　第１節　基本層序 20
　第２節　検出した遺構 21
　第３節　出土遺物 27
第５章　自然科学分析 33
　第１節　土坑埋土の水洗作業 33
　第２節　放射性炭素年代測定 35
第６章　総括 38

引用・参考文献 39
遺物観察表 40
報告書抄録

挿図目次

図１　調査地位置図 2
図２　調査区地区割図 3
図３　西野々遺跡・外子遺跡周辺地勢図 5
図４　西野々遺跡・外子遺跡周辺遺跡分布図 6
図５　トレンチ位置図 8
図６　トレンチ土層断面図 9
図７　トレンチ土層断面写真① 10
図８　トレンチ土層断面写真② 11
図９　No. １・３遺構検出写真 12
図 10　西野々古墳群２号墳周溝（No. ５・6）位置図 12
図 11　No. ５・６土層断面図 13
図 12　No. ５・６遺構検出写真 13
図 13　No.22・23 遺構検出写真 14
図 14　No.26 遺構平面・断面図 15
図 15　No.26 遺構検出写真 15
図 16　No.27 遺構平面図 16
図 17　石室平面・断面図 16
図 18　石室出土遺物 17
図 19　各調査区出土遺物 17
図 20　確認調査トレンチ配置図 18
図 21　各トレンチ土層柱状図 19
図 22　北壁土層断面図 21

図 23　調査区平面図 22
図 24　掘立柱建物 01・02 平面・断面図 23
図 25　掘立柱建物 03 平面・断面図 24
図 26　掘立柱建物 04 平面・断面図 25
図 27　柱穴・小土坑・土坑平面・断面図 26
図 28　焼土充填土坑 100 平面・断面図 27
図 29　不明遺構 122 平面・断面図 28
図 30　第 4 層出土遺物 29
図 31　掘立柱建物・井戸・小土坑出土遺物 30
図 32　焼土充填土坑 100 出土遺物その 1 31
図 33　焼土充填土坑 100 出土遺物その 2 32
図 34　不明遺構 122 出土遺物その 1 32
図 35　不明遺構 122 出土遺物その 2 33
図 36　西野々遺跡から出土した炭化種実 35
図 37　焼土充填土坑 100 焼土 36
図 38　暦年較正結果 37

挿表目次

表 1　西野々遺跡の土壌資料から抽出された炭化材・遺物 34
表 2　西野々遺跡から出土した炭化種実 34
表 3　測定資料及び処理 36
表 4　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 ... 37

図版目次

図版 1　令和元年度 No.27 調査区
図版 2　No.27 石室出土遺物、No.1・26 出土遺物
図版 3　No.22・23・26 出土遺物
図版 4　全景・壁面
図版 5　掘立柱建物 01・02
図版 6　掘立柱建物 02・03
図版 7　掘立柱建物 03・04
図版 8　焼土充填土坑 100 その 1
図版 9　焼土充填土坑 100 その 2 ・不明遺構 122
図版 10　第 4 層出土遺物
図版 11　第 4 層・遺構出土遺物
図版 12　遺構出土遺物・焼土充填土坑 100 出土遺物その 1
図版 13　焼土充填土坑 100 出土遺物その 2
図版 14　焼土充填土坑 100 出土遺物その 3
図版 15　焼土充填土坑 100 出土遺物その 4
図版 16　不明遺構 122 出土遺物その 1
図版 17　不明遺構 122 出土遺物その 2

第１章　調査に至る経緯・経過

第１節　調査の経緯

本調査は、府営農村総合整備事業「伏見堂地区」に伴うものである（図１）。

令和元年６月に大阪府環境農林水産部耕地課より大阪府教育庁文化財保護課に富田林市伏見堂地区の府営農村総合整備事業計画について連絡があり、事業地の埋蔵文化財の取り扱いについて協議が行われた。文化財保護課では、事業地が西野々古墳群及び外子遺跡に含まれるため、周辺の埋蔵文化財包蔵地の状況も鑑みて、環境農林水産部に対して当該事業地において埋蔵文化財の有無を確認するための試掘・確認調査を実施するよう協力を求めた。

協議の結果、令和２年２月に試掘・確認調査を実施した。この調査成果については第３章で詳細に報告するため、ここでは発掘調査を実施した地点の調査区の成果について簡潔に述べる。当地点の試掘調査は２箇所調査区を設定し実施した。両調査区とも現地表より約 42cm（T.P.+85.0m 付近）下で、暗褐色土層を確認し、中世の柱穴や溝などを上面で検出した。これらの調査成果から、中世を中心とした遺構・遺物が調査区の周辺に広がる可能性が高いことが判明した。

この調査成果に基づき令和２年９月に文化財保護法第 97 条の発見通知が環境農林水産部長より提出され、新たに埋蔵文化財包蔵地「西野々遺跡」として周知した。

令和２年４月環境農林水産部長より発掘調査実施の依頼を受け、令和２年 11 月から 12 月まで発掘調査を実施した。発掘調査の対象としたのは、整備事業で切土が予定されている区画の１個所である。

また、これらの調査にかかわる遺物整理・報告書作成は令和３年１月から令和３年 12 月まで行った。

第２節　調査の経過と方法

調査区分

調査区が小範囲であったため、北東区・北西区・南東区・南西区の４つに地区割を行った。遺物の取り上げもこの地区割に基づいて行った（図２）。

発掘作業

調査区を設定し、令和２年 11 月から調査を開始した。調査はまず重機によって現代の耕作土を除去した。それ以下の遺物包含層を、スコップや鋤簾などを使用し人力によって掘削した。掘削した土は人力により調査区外へ搬出した。遺構の検出及び掘削は主に草削り及び移植ゴテを使用した。

当初の計画では、試掘調査の成果から暗褐色土層の上面で遺構の検出を行う予定だった。ところが層序を確認したところ、暗褐色土層の下の黄褐色土層及び基盤層で遺構が認められた。そのため調査計画を変更し、遺構の検出は黄褐色土層及び基盤層上面で行うこととした。

黄褐色土層及び基盤層上面において遺構を検出した後、平板測量を行い 50 分の１の図面を作成した。それに加え、土の堆積状況を示す土層断面図や各遺構の詳細図面をエスロンテープやメジャーを用いて作成した。その後、下層確認のため黄褐色土層及び基盤層の掘削を行い、堆積状況を確認して記録した。重機によって搬出した土の埋戻しを行い、調査は 12 月上旬で終了した。

写真撮影

遺跡全体を撮影するため脚立を利用して全景写真を撮影するとともに、個別の遺構に対して半裁を行い堆積状況の確認や構造分析のための断面写真を撮影した。写真撮影はデジタルカメラ（APS-C セン

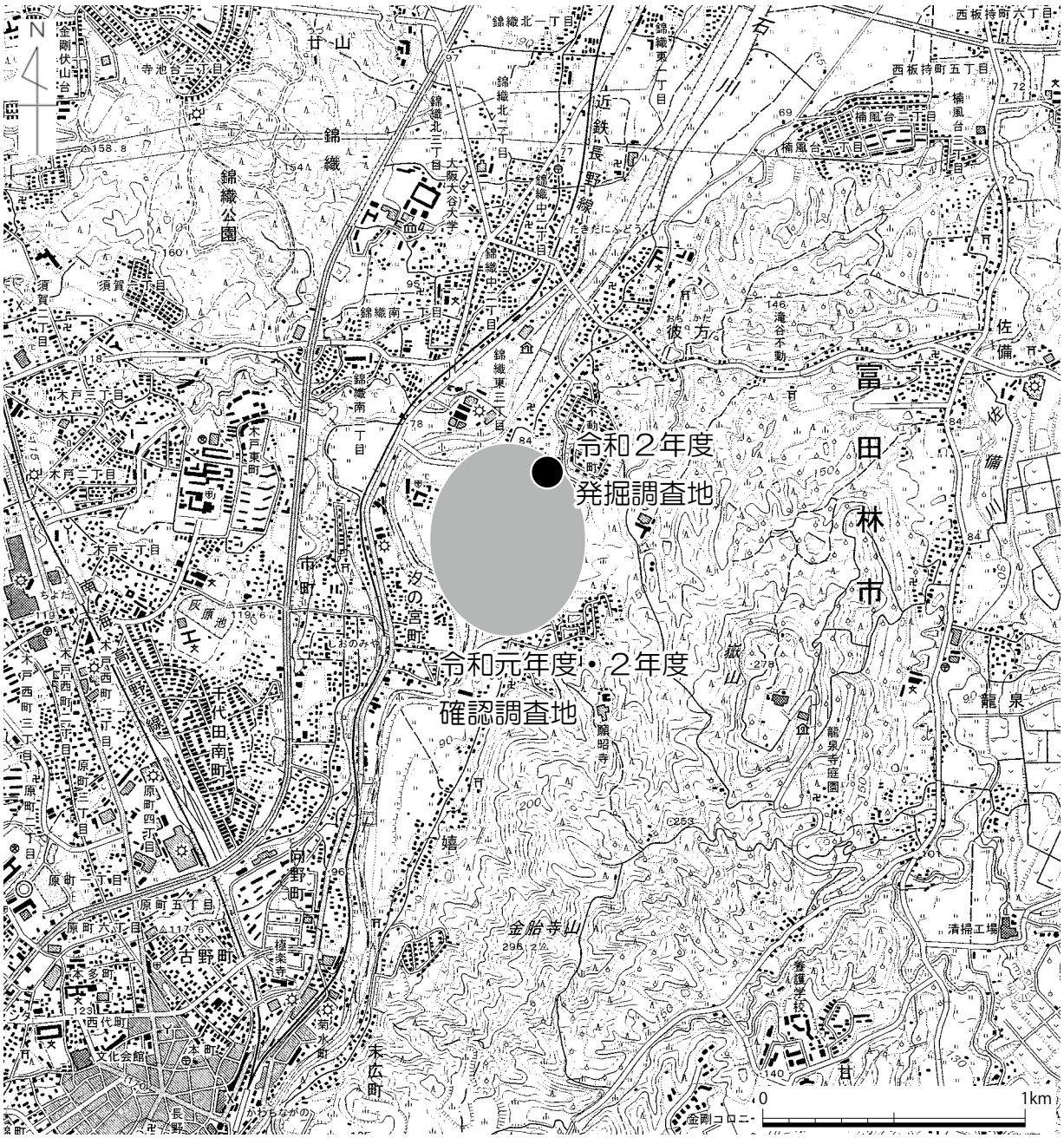


図１　調査地位置図（国土地理院発行２万５千分１地形図に加筆）

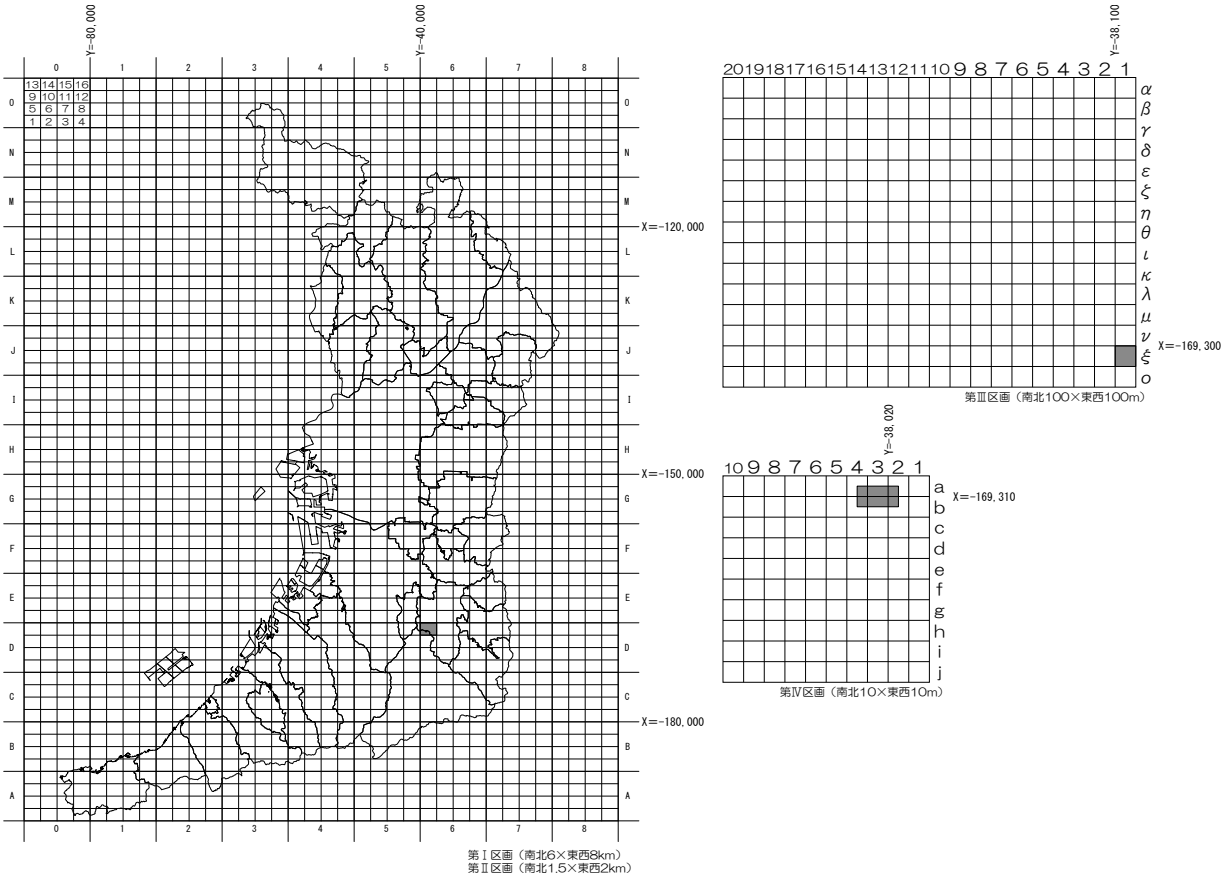
サー）を主に使用し、重要な遺構や全景についてはデジタルカメラ（フルサイズセンサー）を併用して撮影を行った。

自然科学分析

発掘調査を進めると、調査区北東地区において焼土充填土坑及び不明遺構が検出された。これらの遺構の性質や時期を明らかにするため、埋土の水洗篩分・内容物抽出及び年代測定を行う必要があると判断した。資料は発掘担当者が採取・梱包し、それを委託業者に渡し分析を行った。分析の結果は第５章において詳細に述べる。

整理等作業

報告書の作成は令和３年１月から実施した。現地で記録した図面・写真の整理を行うとともに、遺物



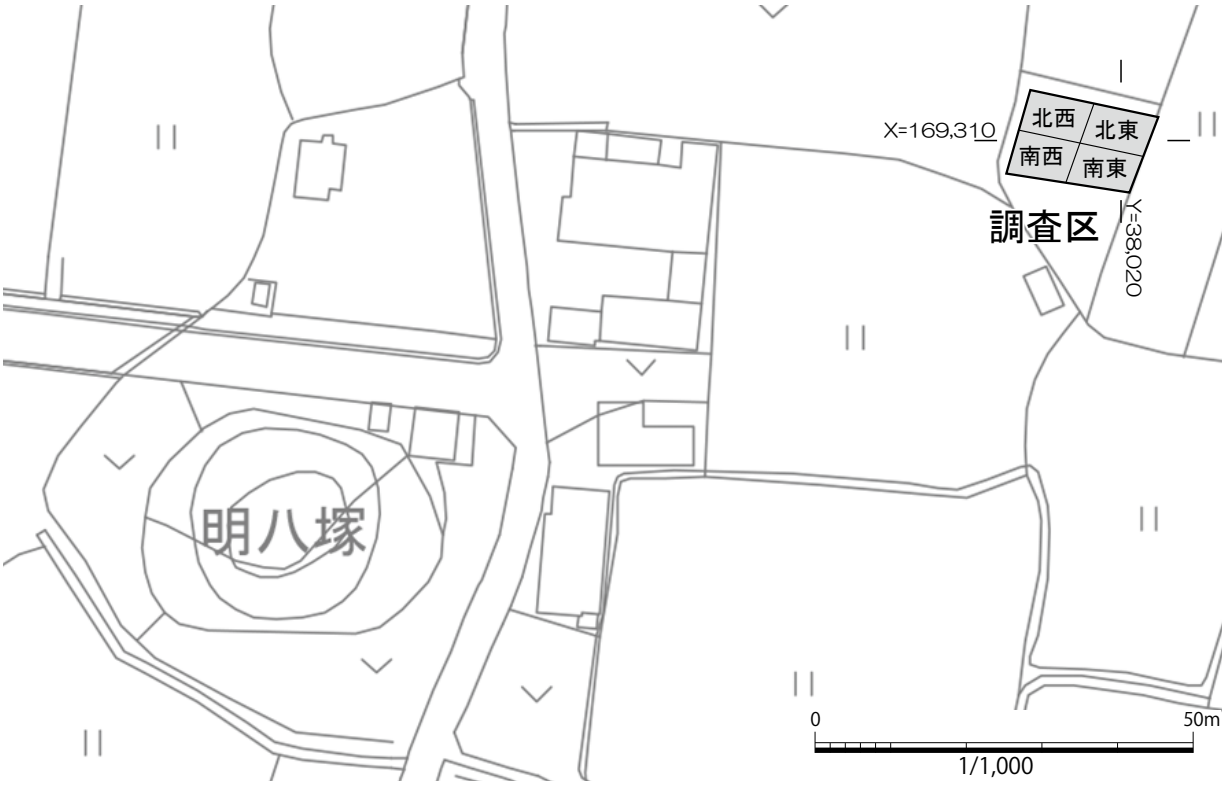


図２　調査区地区割図（富田林市地理情報公開サイト掲載地形図をもとに作成）

の洗浄・復元、実測を行った。遺物の量はコンテナ４箱分であった。

遺物実測図は、スキャナーで原図を取り込んでデジタルトレースを行い、必要に応じてデジタル化した拓本を貼り込み、挿図を作成した。

遺構図面は原図の取り込みを外部に発注し、デジタルトレースを行って挿図を作成した。

現地で撮影した写真に関しては、現像及びデジタルプリントを行いファイルに格納した。また、報告書に掲載する遺物については、委託によって写真撮影を行った。

以上の作業と並行して報告文を作成し、報告書の編集作業を行った。

第２章　地理的環境と歴史的環境

第１節　地理的環境

西野々遺跡は富田林市域の南側、石川の東岸に広がる低位段丘上に位置する（図３）。この低位段丘は石川によって形成された河岸段丘と呼ばれるものであり、南は河内長野市域、北は富田林市板持の範囲にわたる。段丘の地質は３～ 10cm 大の和泉砂岩・礫岩や花崗岩礫を含む礫層で構成されている。石川はこの付近で蛇行しており、石川と段丘の間には比高差約 10m の段丘崖が存在する。

この段丘の東側には嶽山が位置している。嶽山の北には丘陵が彼方の周辺から板持にかけて南北に延びている。嶽山の南には富田林市域で最も高い標高 296.4m の金胎寺山がそびえている。嶽山の山体はサヌカイトであるが、金胎寺山の山体は花崗岩である。

遺跡周辺は比較的区画の大きい耕作地が広がっており、耕作地の間には南の嬉付近で石川から取水した水路が北に向かって流れている。現在の集落は石川の右岸に沿って、河内長野から嬉、横山、伏見堂、彼方を経て板持へと至る街道の周辺に営まれている。

第２節　歴史的環境

縄文時代

縄文土器と石器が外子遺跡で発見されている。外子遺跡は 1971 年の富田林市による分布調査で発見されたが、縄文時代に属する遺構はほとんど発見されていない。遺物は富田林市の分布調査で石鏃と縄文土器が、関西大学の分布調査で石鏃、石槍及び石錐が出土している。

弥生時代

縄文時代に引き続き弥生時代の遺跡も数は少ない。西野々遺跡周辺では錦織南遺跡で石鏃がわずかに出土している程度である。

古墳時代

西野々遺跡周辺の遺跡数が増加し、この時期から当地でも開発が盛んになったと考えられる。西野々古墳群は富田林市伏見堂に所在し、西野々遺跡の西側に立地している。古墳群は５基の古墳で構成されている。１号墳は明八塚と呼ばれる直径約 46 メートルの円墳である。周囲には周濠をめぐらせている。遺物は埴輪及び須恵器が出土している。時期は埴輪の特徴から６世紀前半と考えられる。２号墳は千代塚と呼ばれる直径 25 メートルの円墳である。墳丘は中央がえぐり取られ半壊している。３～５号墳は調査が行われていないため、墳丘規模や遺物などの詳細は不明である。

田中古墳群は西野々古墳群と同じく伏見堂に所在し、嶽山から派生する丘陵の南斜面に立地する。古墳群は４基の古墳で構成されている。１号墳は径 25 メートルの円墳である。主体部は横穴式石室で全

長 10.5 メートル、玄室長 5.5 メートルを測る。遺物は須恵器、鉄鏃、鉄刀残欠、辻金具や杏葉などの馬具が出土している。２号墳は径 20 メートルの円墳である。主体部は両袖式の横穴式石室で、全長 7.5 メートル、玄室長 3.2 メートルを測る。玄室内からは二上山凝灰岩で作られた家形石棺の蓋を検出している。遺物は須恵器の壺が出土している。時期は家形石棺の特徴から６世紀末と考えられる。３号墳は径 25 メートルの円墳である。主体部は両袖式の横穴式石室で、全長 8.5 メートル、玄室長 3.8 メートルを測る。４号墳は径 30 メートルの円墳である。主体部は片袖式の横穴式石室で、全長 9.2 メートル、玄室長 4.2 メートルを測る。石室の形状から１～３号墳より後に築造されたと考えられる。

嶽山古墳群は富田林市嬉・横山に所在し、嶽山西麓から中腹にかけて分布する古墳群である。現在 23 基の存在が確認されている。全て円墳であり、内部構造の判明する古墳は全て横穴式石室である。墳丘は 17 号墳が直径 28m で最も大きく、それ以外は 10m 台である。遺物は３号墳から円筒埴輪、２号墳付近から須恵器が出土している。これらの特徴から古墳群は、６世紀前葉から後葉にかけて継続して築造されたと考えられる。５号墳は直径 12m である。横穴式石室は南西に開口しており、片袖式である。玄室長は 3.2m、幅は 1.3 ～ 1.4m を測る。22 号墳は直径が不明である。横穴式石室は南に開口

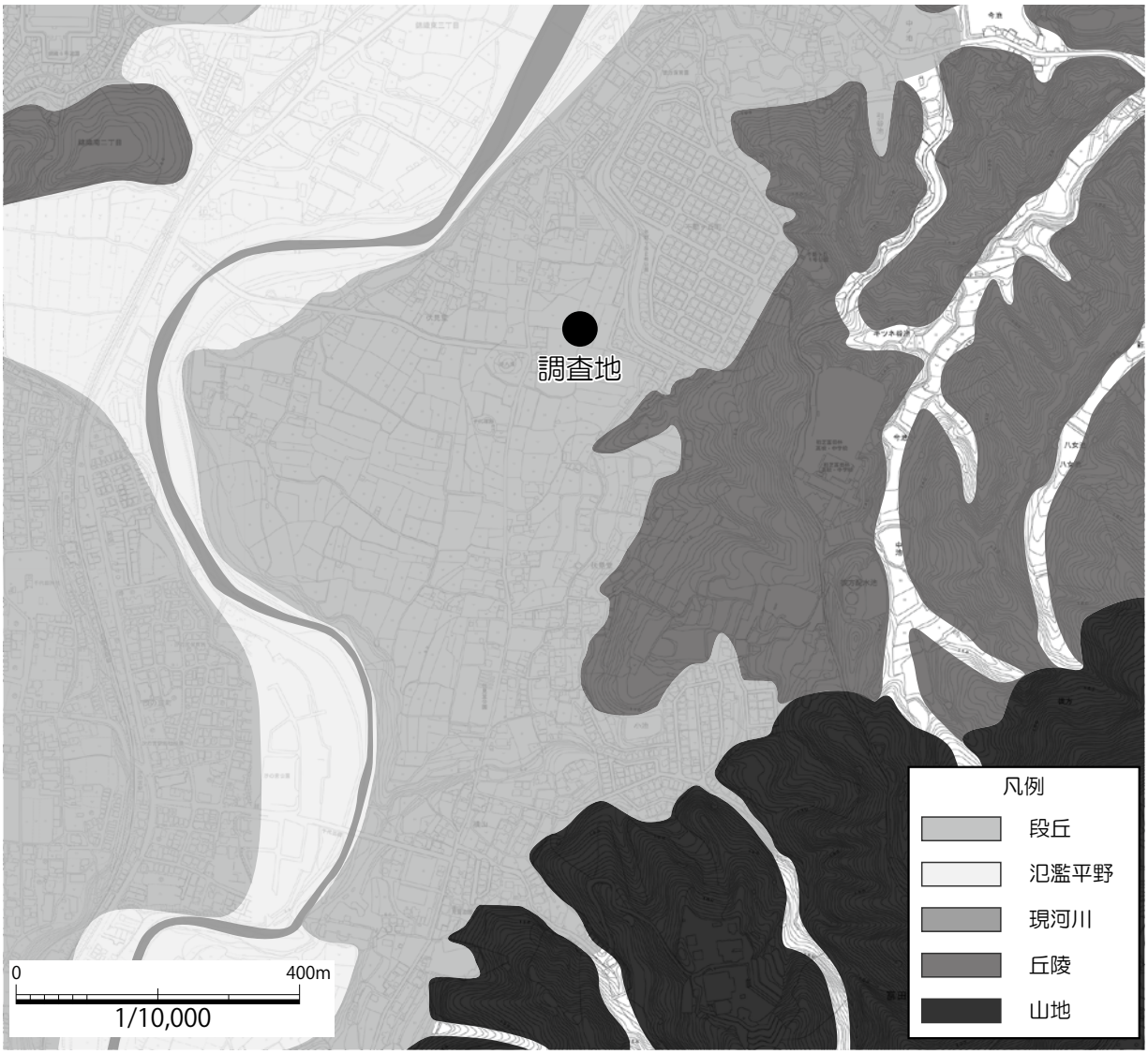


図３　西野々遺跡・外子遺跡周辺地勢図（富田林市地理情報公開サイト掲載地形図をもとに作成）

しており、両袖式である。玄室長は 3.0m、幅は 1.1 ～ 1.3m を測る。双方とも遺物は出土していない。

奥ノ谷古墳群は富田林市伏見堂に所在し、嶽山から北に延びる尾根上に立地している。１～３号墳で構成されているが、調査を行っているのは１号墳のみである。１号墳は長径約 20m、短径約 14m の円墳であり、墳丘高は約２m を測る。埋葬施設は木棺直葬で、葺石や埴輪などの外部施設は検出されていない。遺物は須恵器の坏蓋・坏身及び鉄釘の破片と考えられる鉄片が出土した。時期は須恵器の形態から７世紀前葉と考えられる。

そのほか田中古墳群の東側には滝谷南古墳群が存在するが、詳細は不明である。

古代

古墳時代とは対照的に、古代の遺跡は少ない。富田林市域では条里制地割の痕跡が確認できるところもあるが、西野々遺跡周辺では確認できない。石川を挟んだ西岸に広がる錦織南遺跡は、北は錦織遺跡が隣接し、錦織廃寺も位置する立地である。大阪府が行った調査で掘立柱建物や井戸が出土している。遺物は須恵器、土師器、製塩土器が出土しており、奈良時代に属すると考えられる。それ以外に土坑やピット、包含層から 12 世紀から 13 世紀前半の瓦器椀や青磁椀、白磁椀が出土している。

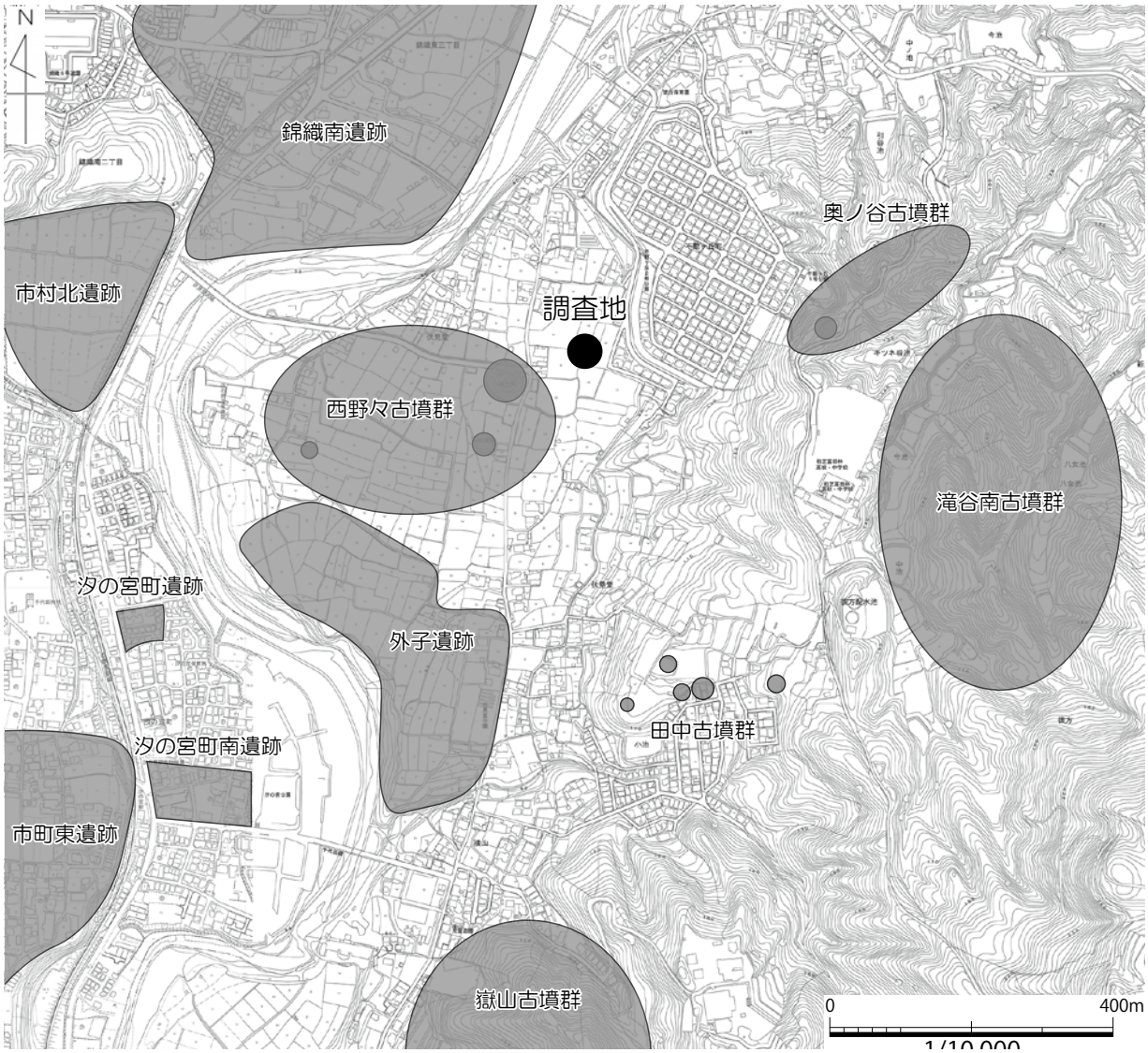


図４　西野々遺跡・外子遺跡周辺遺跡分布図（富田林市地理情報公開サイト掲載地形図をもとに作成）

平安時代後期になると当地には石清水八幡宮領の「伏見荘」が設置される。また伏見荘と散在する形で「甲斐荘」も設置された。さらに南の嶽山・金胎寺山西麓には興福寺領の「宇礼志荘」が設置される。伏見荘は甲斐荘に吸収されて姿を消していくが、甲斐荘と宇礼志荘は中世まで存続していく。

中世

錦織南遺跡で土坑やピットが検出されており、12 世紀の瓦器椀が出土している。しかしそれ以外は土器片などが採集されている程度であり、建物などの明確な遺構は確認されていない。

西野々遺跡周辺では前述のとおり甲斐荘と宇礼志荘が存続していたと考えられるが、鎌倉時代から室町時代の前半にかけての様相は不明である。

次に当遺跡周辺が文献史上で登場するのは、室町時代後期に起こった嶽山合戦のころである。嶽山合戦は長禄４年（1460 年）畠山政長と畠山義就が嶽山に位置する嶽山城をめぐり争った合戦である。合戦は嶽山城の陥落で畠山政長の勝利に終わるが、その後永正２年（1505 年）にも政長の子と義就の孫が争い、「嶽山の麓大焼」と記されるような激しい戦闘が繰り広げられる。

近世

伏見堂や横山、嬉などの村名が正保２年（1645）の「河内国正保郷帳写」で確認できることから、西野々遺跡周辺にも近世村落が営まれていたことがわかる。これらの村では河内長野市三日市町で石川から取水した水を利用しており、伏見堂村には２つのため池が存在した。ただし主要な水利施設の具体的な成立年代は不明である。

第３章　試掘・確認調査

第１節　令和元年度調査

第１項　調査にいたる経緯

大阪府南河内農と緑の総合事務所の府営農村総合整備事業に先駆け、計画地内における遺跡の範囲及び遺跡内の遺構・遺物の分布状況を確認するために、令和２年１月から２月にかけ試掘・確認調査を行った。調査箇所は、当初切土が予定されていた部分 30 地点（図５）に 5m × 1m のトレンチを設定し、掘削が困難な箇所や遺構の広がりが認められた箇所においては適宜範囲を変更した（No.15：2m × 1m、No.24：3m × 1m、No.25,26,30：5m × 2m、No.27：9m × 1m）。

調査の結果、No.1，3，5，6，22，23，26，27 において古墳時代から中世にかけての遺構を確認することができた。この結果を受け、No.1，3 を含む範囲を新規発見の埋蔵文化財包蔵地「西野々遺跡」として、令和２年度に発掘調査を行うこととなった。また No.22，23 については、令和４年度以降に発掘調査が行われる予定となっている。なお西野々２号墳の周囲に溝を検出した No.5，６、中世の包含層を確認した No.26、飛鳥時代の古墳石室を検出した No.27 については、南河内農と緑の総合事務所と協議の上、計画を変更し、盛土で保護の上、現地に保存されることとなった。これら成果概要については令和２年度刊行の大阪府教育庁文化財調査事務所年報 24 において既に報告しているが、遺構・遺物が確認された箇所を中心に改めてその内容を詳細に報告したい。

第２項　調査成果

No. １，３

西野々古墳群北東側の範囲外の箇所に調査区を設定した。現代及び近世の耕作土を除去した地表下約30㎝の暗褐色土上面で柱穴や溝と考えられる遺構を検出し（図９）、中世の土師皿、甕、羽釜、瓦器な

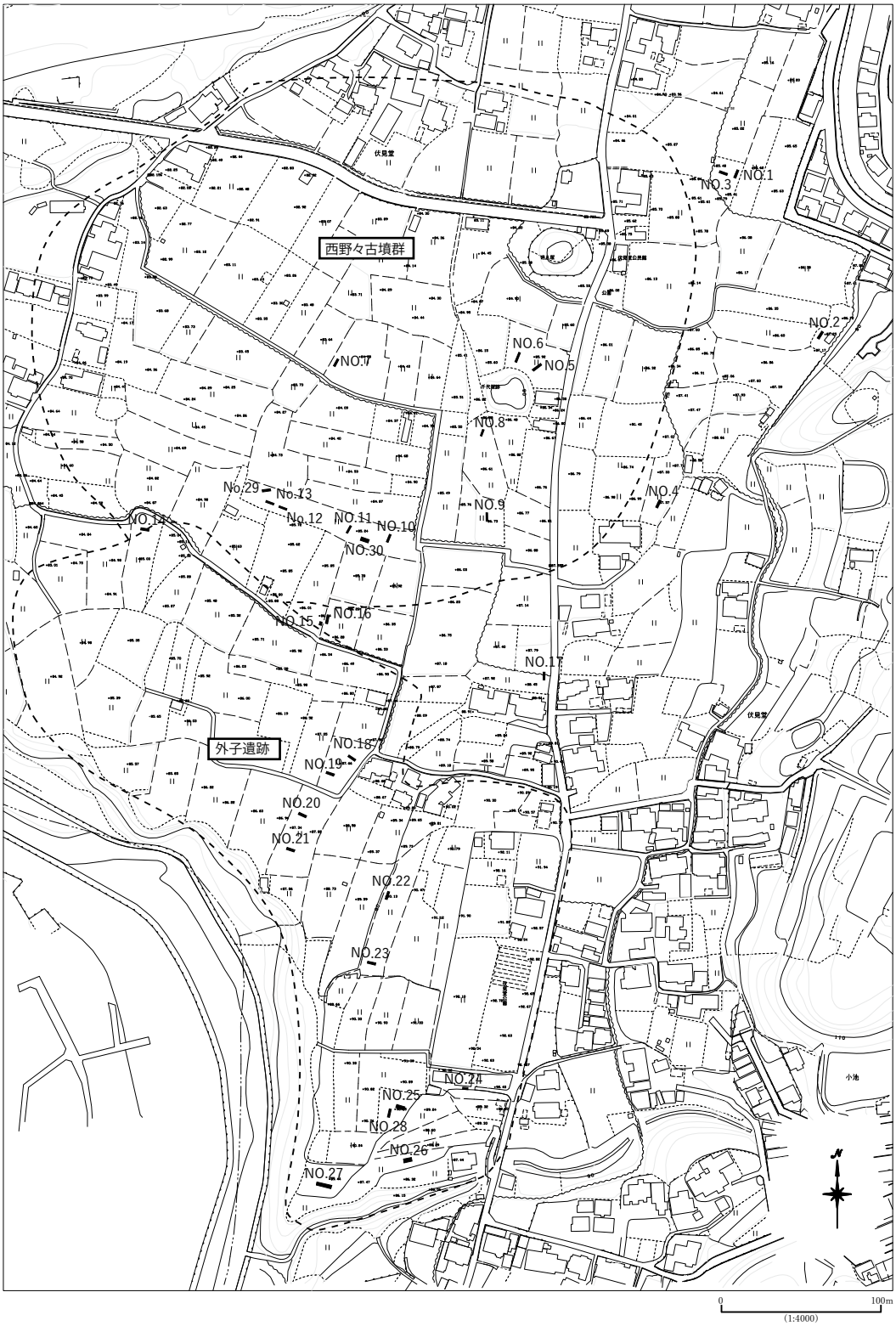


図５　トレンチ位置図

どが出土した（図 19）。試掘範囲の中でも中世の遺構・遺物が集中する箇所であり、令和２年度に発掘調査が行われることとなった。層序及び遺構詳細については本発掘調査の報告である第４章で詳述する。

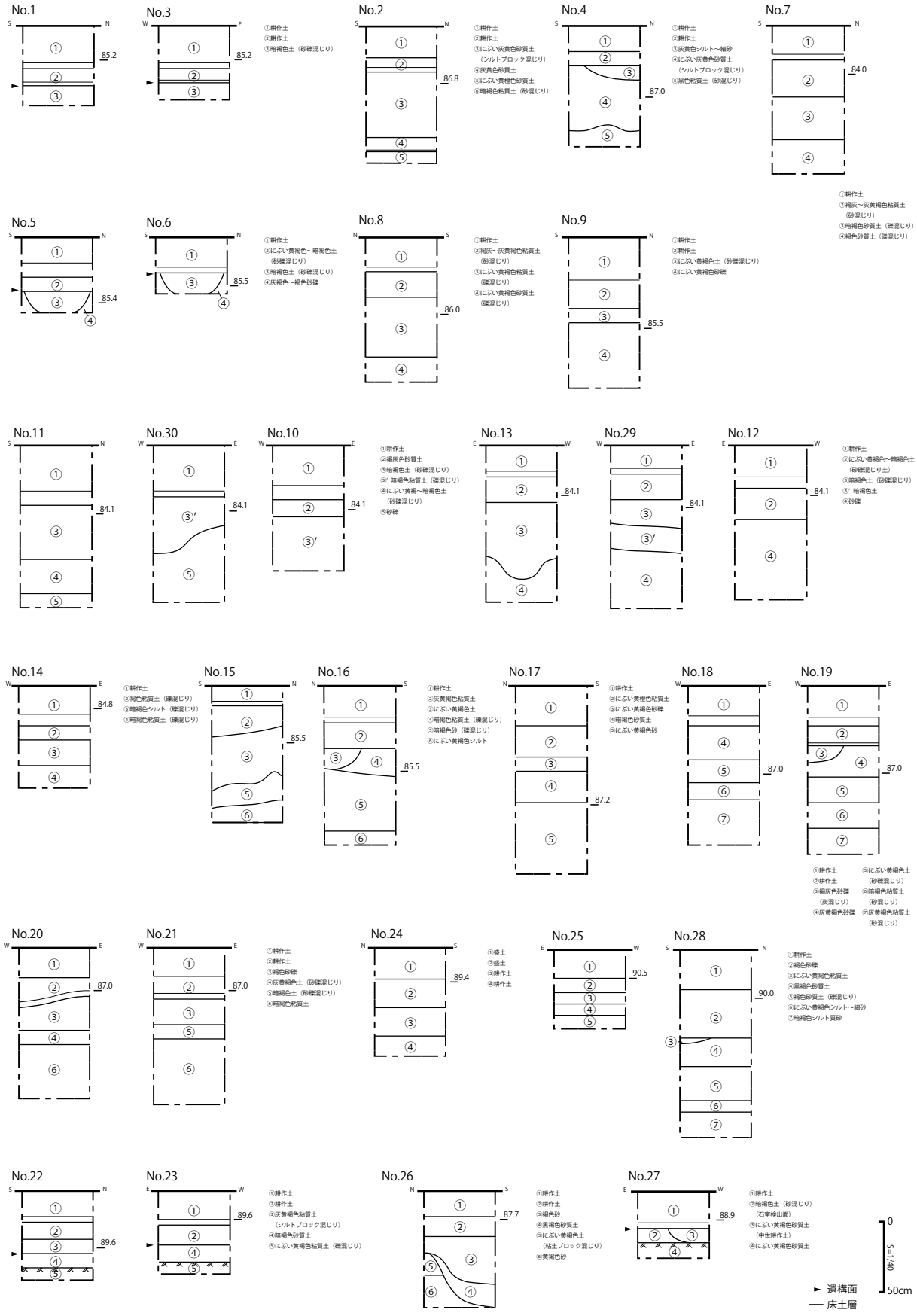


図６　トレンチ土層断面図

No.1

No.3

No.2

No.4

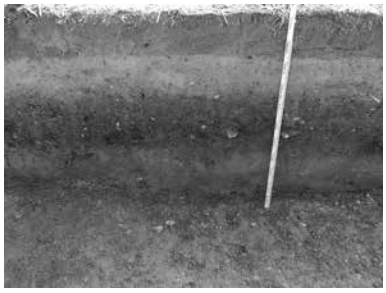
No.5

No.6

No.8

No.7

No.9


No.11

No.30

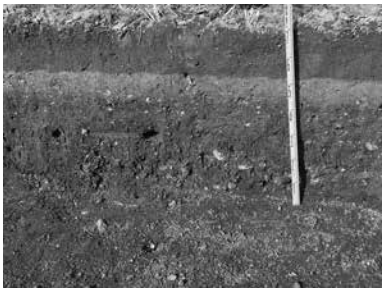
No.10

No.13

No.29

No.12

図７　トレンチ土層断面写真①

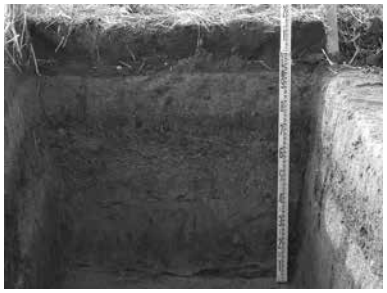

No.14

No.15

No.16

No.17

No.18


No.19

No.20

No.21

No.22

No.23

No.25

No.28

No.24

No.26

No.27

図８　トレンチ土層断面写真②

No.1（南から）

No.3（東から）

図９　No. １・３遺構検出写真

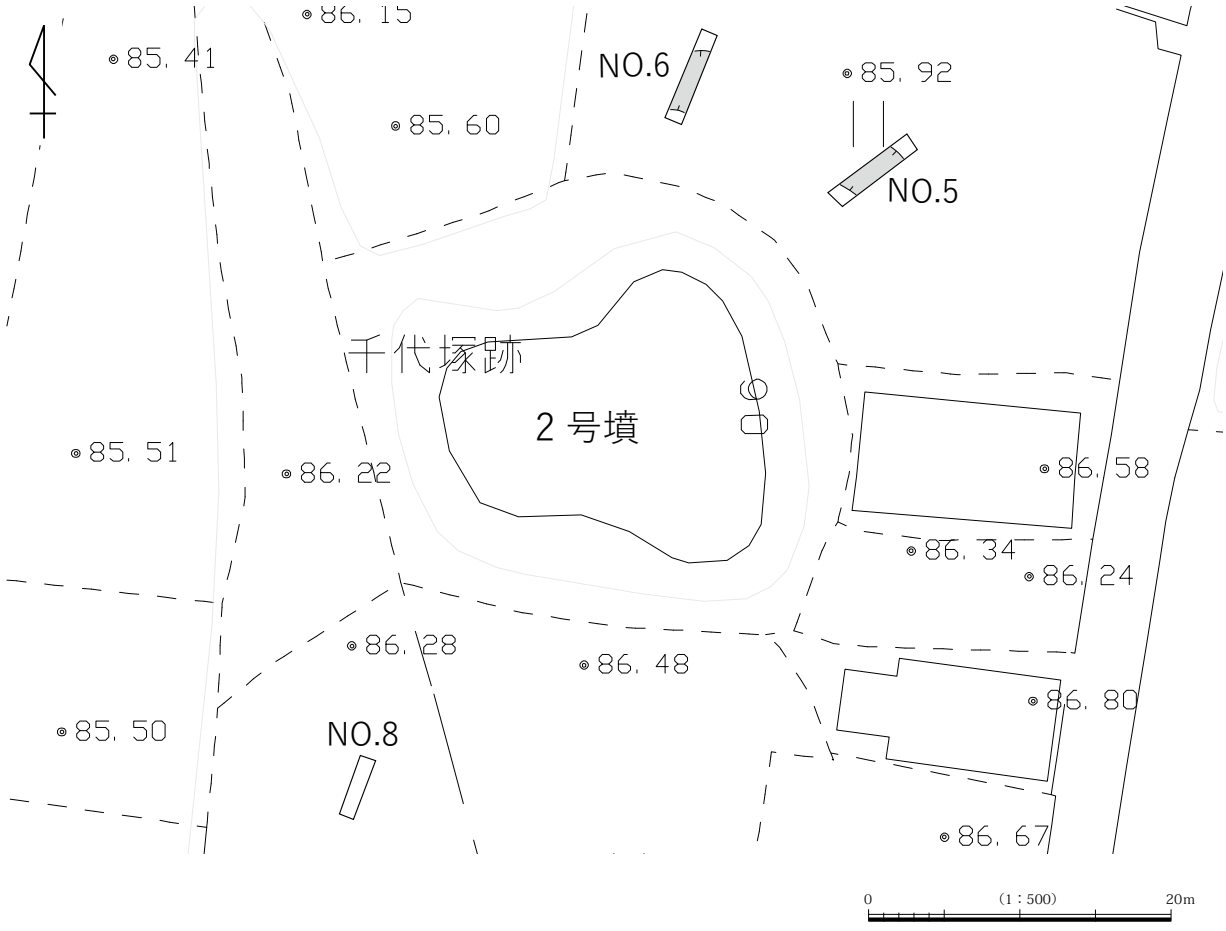


図 10　西野々古墳群 2 号墳周辺調査区位置図

No.2

古墳群の範囲外北東側の山裾に近い箇所に調査区を設定した。地表から２面の近現代の耕作土の下に、厚さ 40㎝程度の明黄褐色～にぶい黄褐色砂質土（シルトブロック混じり）の盛土、耕作土と思われる灰黄色シルト層、にぶい黄橙色砂質シルト層の２面を確認した。盛土及び耕作土からわずかに遺物が

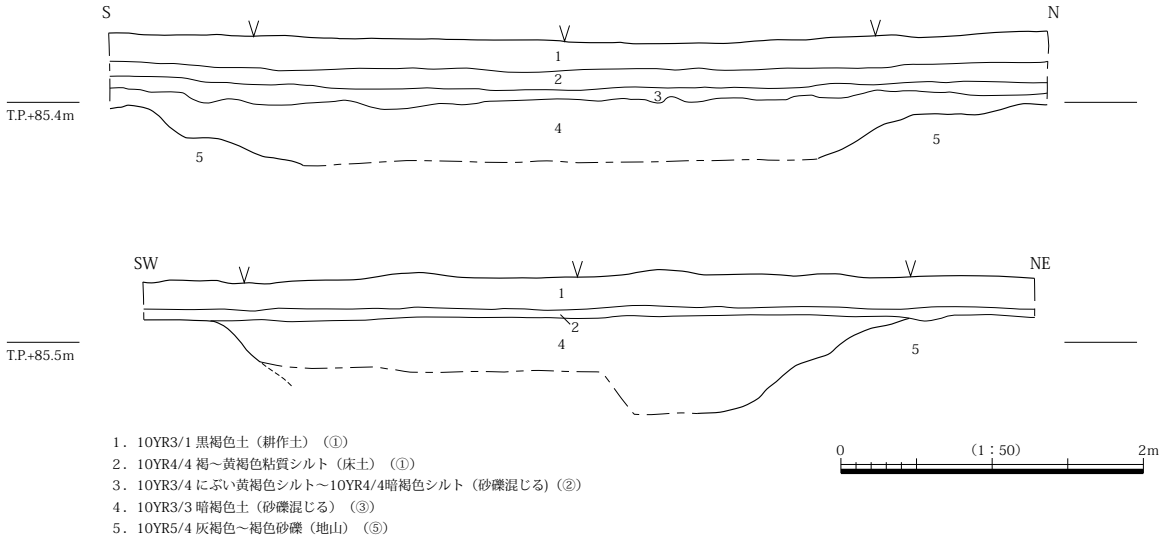


図 11　No. 5・6 土層断面図

No.5（北東から）

No.6（北から）

図 12　No. 5・6 遺構検出写真

出土したが、遺構は確認できなかった。

No.4

古墳群の範囲外南東側の獄山山麓側に調査区を設定した。地表から 2 面の近現代の耕作土の下に、厚さ 40㎝程度のにぶい灰黄色砂質土（シルトブロック混じり）の盛土、さらにその下に黒色粘質土の湿地状の堆積物を確認したが、遺構は確認できなかった。

No.5，6

西野々 2 号墳（千代塚）の北東側に 2 箇所調査区を設定した。基本層序は概ね一致し、No.6 は現代耕作土、にぶい黄褐色～暗褐色土層の下、No.5 は現代耕作土の直下の灰褐色～褐色砂礫層上面に幅 4.5 m程度の溝を検出した（図 11）。No.5,6 の検出状況から溝は西野々 2 号墳の墳丘裾に沿うようになっており（図 12）、この古墳の周濠となる可能性が高い。今回の調査では遺構の検出にとどめ、溝内については部分的に掘り下げたのみであるが、埋土は砂礫の混じる暗褐色土であり、古墳に関する遺物は出土しなかったが、表層からは中世の瓦器椀片が出土している。

No.8

西野々２号墳の南西側に調査区を設定した。現地表は No.5,6 に比べ 70㎝程高くなっており、現代の耕作土の下に、褐灰～灰黄粘質土層（砂混じり）、礫を含むにぶい黄褐色粘質土層、礫を含むにぶい黄褐色砂質土層を確認したが、遺物や遺構は確認できなかった。

No.7

古墳群の範囲中央に調査区を設定した。現代の耕作土の下に、砂が混じる褐灰～灰黄粘質土層、礫を含む暗褐色砂質土層、褐色砂質土層を確認したが、遺構は確認できなかった。

No.9

No.8 の南側に調査区を設定した。現代の耕作土の下に、にぶい黄褐色土層（礫混じり）、にぶい黄褐色砂礫層を確認したが、遺物、遺構は確認できなかった。

No.10 ～ 13，29，30

No.10 ～ 13，29，30 は古墳群範囲の南側に調査区を設定した。No.13，No29，No.12 は方墳と考えられる西野々第３号墳に隣接する箇所に調査区を設定した。各調査区ともにおおむね層序は一致し、現代の耕作土の下に、にぶい黄褐色～暗褐色土（砂礫混じり）、暗褐色土（砂礫混じり）、河川堆積によるものと考えられる砂礫層を確認した。現代耕作土より染付の小片がわずかに出土したが、古墳に伴う周溝やその他遺構は確認できなかった。No.10，11，30 は、さらにその東側に調査区を設定した。それぞれ現代の耕作土の下に、褐色灰色砂質土、暗褐色粘質土（礫混じり）などを確認したが、特に No.30 では、最下層に河川の堆積に起因する砂礫層を確認し、この上層の所々にこの砂礫を含む層があることから後世に大きく改変を受けていることが確認された。No.10 より瓦器椀、No.11 より土師皿小片が出土したのみで、いずれの調査区においても遺構は確認できなかった。

No.14

古墳群と外子遺跡の境界に調査区を設定した。現代の耕作土の下に、褐色粘質土層（礫混じり）、暗褐色土層（礫混じり）、暗褐色粘質土層（礫混じり）を確認したが、遺物、遺構は確認できなかった。

No.15，16

古墳群と外子遺跡の範囲に挟まれる箇所に調査区を設定した。No.15，16 の層序は一致し、現代の耕作土の下に、灰黄褐色粘質土層、にぶい黄褐色土層、暗褐色砂層（礫を含む）、にぶい黄褐色シルト層を確認した。遺物は小片が出土したのみで、遺構は確認できなかった。

No.22（南から）

No.23（西から）

図 13　No.22・23 遺構検出写真

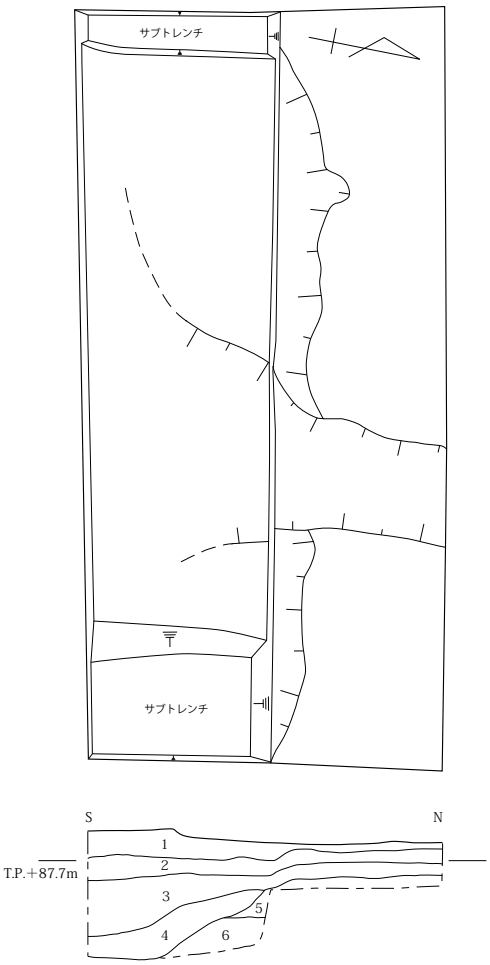


図 14　No.26 遺構平面・断面図

No.26（南西から）

図 15　No.26 遺構検出写真

No.17

外子遺跡の北東側の範囲外の箇所に調査区を設定した。現代の耕作土の下に、にぶい黄橙色粘質土層、にぶい黄褐色砂質土層（礫を含む）、暗褐色砂質土層、にぶい黄褐色砂礫層を確認した。遺物、遺構は確認できなかった。

No.18 ～ 21

外子遺跡の中央より西側、石川が西側に曲がる地点の北側にひろがる箇所に調査区を設定した。No.18，19 は、現代の耕作土の下に、灰黄褐色砂質土層、にぶい黄褐色土層（砂礫混じり）、暗褐色粘質土（砂混じり）、灰黄褐色粘質土（砂混じり）の層序でおおむね一致するが、No.19 では、2 面の近現代の耕作土の下に、部分的に整地層と想定される褐灰色砂礫土層（炭混じり）を確認した。No.20，No21 では、2 面の近現代の耕作土の下に、褐色砂礫層、灰黄褐色土層（砂礫混じり）、暗褐色粘質土層を確認した。No.19 で現代耕作土より土器小片が出土したのみで、いずれの調査区においても遺構は確認できなかった。

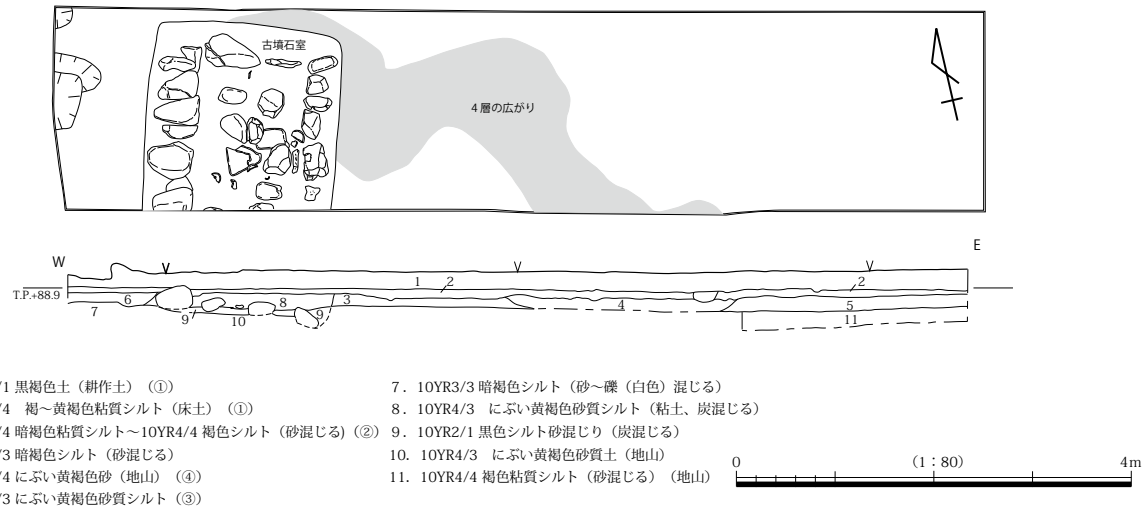
No.22，23

外子遺跡の中央より東側、石川の河岸段丘の中腹に位置するところに南北の調査区（No.22 ）、東西の調査区（No.23）を設定した。基本層序はおおむね一致し、No.22 は現代耕作土、近世以降の耕作土、灰黄褐色粘質土の下、No.23 は現代耕作土、近世以降の耕作土の下の暗褐色砂質土上面において、径 20 ～ 30㎝程度の数基のピット及び径 50 ～ 60㎝の土坑を検出した（図 13）。また暗褐色土層は地山直上に厚さ 10㎝程度で堆積し、縄文時代の遺物を含むものであった。No.22 検出のピットの上面からは、敲石、縄文土器口縁部、No.23 の暗褐色砂質土層よりサヌカイトの石核が出土している（図 19）。

この周辺では発掘調査は行われていないが、関西大学が行った踏査の成果から最も縄文時代の石器類が散布するエリアであることがわかっており（関西大学 1977）、今回の成果も踏まえ縄文時代の遺構が広がる可能性が高いことから、今後の本発掘調査を予定している。

No.24

外子遺跡の南側、石川に流れ込む河川によって作られた谷状の地形の斜面地に調査区を設定した。



1．10YR3/1 黒褐色土（耕作土）（①）
2．10YR4/4　褐～黄褐色粘質シルト（床土）（①）
3．10YR3/4 暗褐色粘質シルト～10YR4/4 褐色シルト（砂混じる）（②）
4．10YR3/3 暗褐色シルト（砂混じる）
5．10YR5/4 にぶい黄褐色砂（地山）（④）
6．10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト（③）
7．10YR3/3 暗褐色シルト（砂～礫（白色）混じる）
8．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト（粘土、炭混じる）
9．10YR2/1 黒色シルト砂混じり（炭混じる）
10．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土（地山）
11．10YR4/4 褐色粘質シルト（砂混じる）（地山）

図 16　No.27 遺構平面図

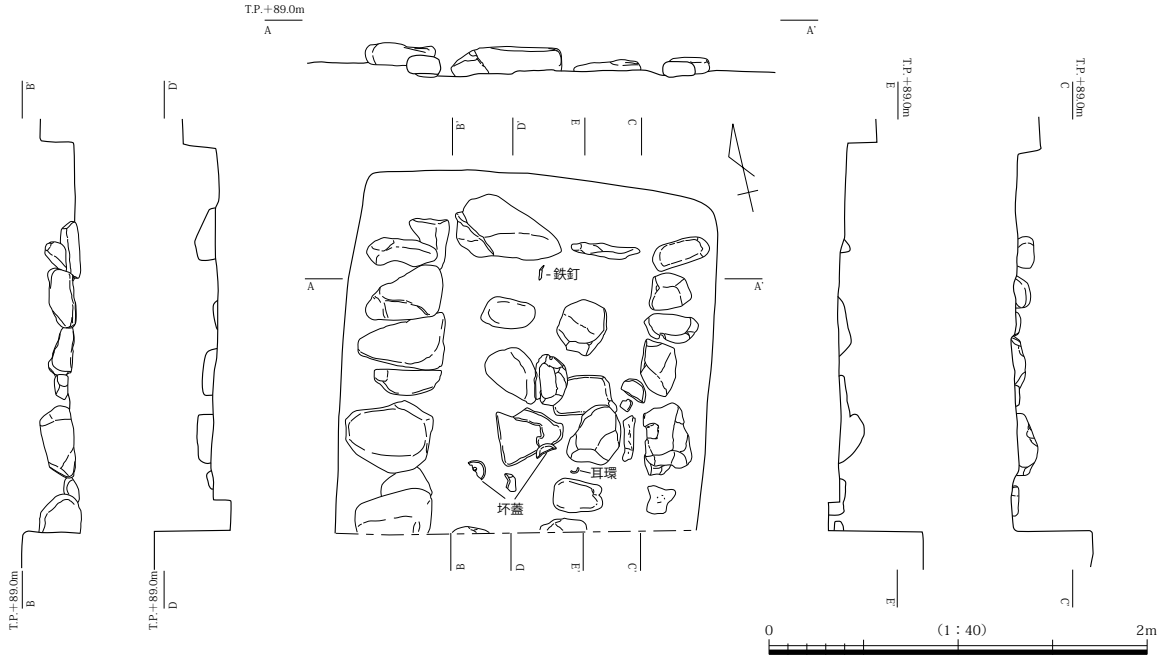


図 17　石室平面・断面図

2 面の現代の盛土の下に、近現代の耕作土 2 面を確認した。遺物、遺構は確認できなかった。

No.25，No.28

石川の河岸段丘と石川に流れ込む河川によってつくられた尾根状の地形上に調査区を設定した。No.25 は、現代の耕作土の下に、褐色砂礫層、にぶい黄褐色粘質土層、黒褐色砂質土層、褐色砂質土層（礫混じり）を確認した。遺物は耕作土より土器小片が出土したのみで、遺構は確認できなかった。No.28 は層序はおおむね No.25 と一致するが、地形的にやや低くなっており、層は全体的に厚くなる。遺構、遺物は確認できなかった。

No.26

No.24 より南側で、さらに低い谷状の地形の斜面地の段々畑に調査区を設定した。2 面の近現代の耕作土の下に中世の遺構面を確認した（図 14、15）。調査区の南側に落ち込み状に堆積した褐色砂層や

遺構面となるにぶい黄褐色土層より遺物がまとまって出土した。

このにぶい黄褐色土層には遺物とともに粘土ブロックが混じっていることから整地層と考えられ、上面には南北方向の溝状遺構を検出している。整地層の存在や遺物の出土量も比較的多いことから、周辺に遺構が広がることが想定される。出土した遺物は、12 世紀代の土師皿、瓦器、土師質の羽釜であった。

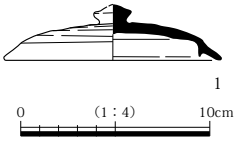


図 18　石室出土遺物

No.27

No.25，No.28 と同じ尾根状の地形の南端部分に調査区を設定した。地表から耕作土を除去した暗褐色土上面で、これまで未確認であった小規模な古墳の石室を確認した（図 16、図版 1 ）。地表から 20 ㎝程度で検出したが、石室のほとんどは削平されており、墳丘は調査区断面からは確認することはできなかった。今後の本調査を想定していたため石室の検出にとどめているが、検出面において耳環、須恵器坏蓋、鉄釘が出土しており（図 17、図版 1 ）、こうした遺物の出土状況から石室の床面に近い部分がかろうじて残存していたものと考えられる。石室の大きさは内側で縦 1.4 m以上、横 1.1 mで、石室内には平坦面を上にした 2 列の石列が並んでいることから、棺台として機能していたものと推定される（図 17）。開口部は確認できていないが、小規模な横穴式石室と考えられる。また石室の周りには暗褐色シ

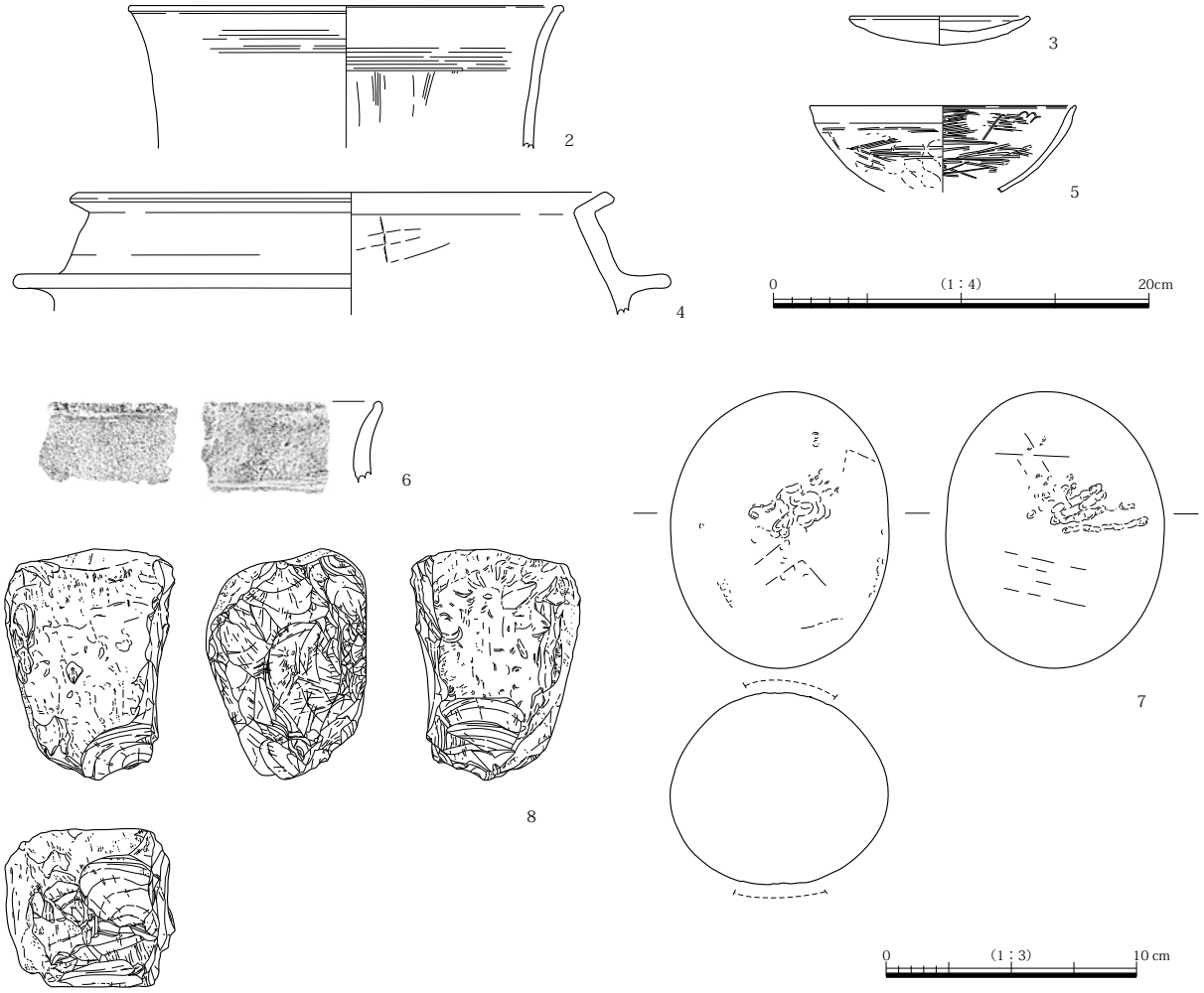


図 19　各調査区出土遺物

2：No.1，3 ～ 5：No.26，6,7：No.22，8：No.23

ルト層が広がっていたが（図 16）、平面形が不定形であり石室を巡らないことから周濠ではなく、石室築造以前の堆積層であると考えられる。

石室出土遺物

１は須恵器坏Ｇ蓋である。宝珠つまみ、蓋の内面にはかえりを持ち、口縁部付近でやや外反する器形となる。口径は 11.3㎝である。７世紀半ばに比定できる。全体的には青灰色であるが、口縁部を巡るように赤褐色を呈するという特徴的な色調をもつ（図版２）。これは塗彩したものではなく、焼成時に生じたものと考えられる。この他に出土した耳環は銅芯であり（図版２）、外径（ヨコ）3.0cm、（タテ）2.7cm、内径（ヨコ）1.6cm、（タテ）1.3cm、断面径 0.7cm であった。

各調査区出土遺物

２は No.1 から出土した土師器甕である。口縁部が外反し、胴部は寸胴となる器形である。復元径は 23.0㎝。口縁部直下は横方向のハケ目を施し、内面は縦方向のハケ目となっている。

３～５は No.26 から出土した。３は土師器皿である。体部がわずかに丸みを帯び、器高 1.5㎝と浅い器形となる。口径は 9.4㎝。４は土師質の羽釜である。口縁部を外側にく字状に折り曲げた器形を呈する。復元径は 27.0㎝。５は瓦器椀である。内湾する体部で、口縁部はナデによりわずかに外反する器形となる。復元径は 14.1㎝。内外面ともに粗いヘラミガキが施される。いずれも 13 世紀の所産と考えられる。

６・７は No.22、８は No.23 から出土した。６は縄文土器の口縁部で、外反する器形となる。内外面ともにナデによる調整であるが、屈曲部にわずかに条線を残す。７は敲石である。中央部にアバタ状の敲打痕を残す。最大長 11.1㎝、最大幅 8.8㎝となる。８はサヌカイト製の石核である。このほかに剥片も出土している。いずれも縄文時代の遺物であるが、土器の特徴から後期～晩期の所産である。

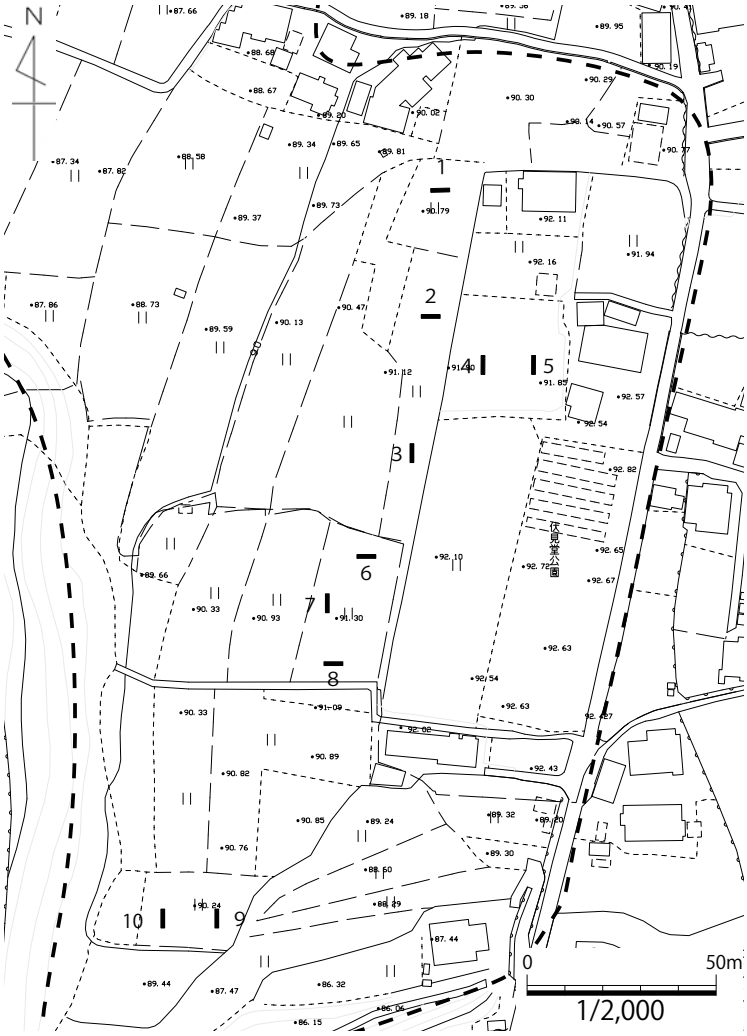


図 20　確認調査トレンチ配置図

第２節　令和２年度調査

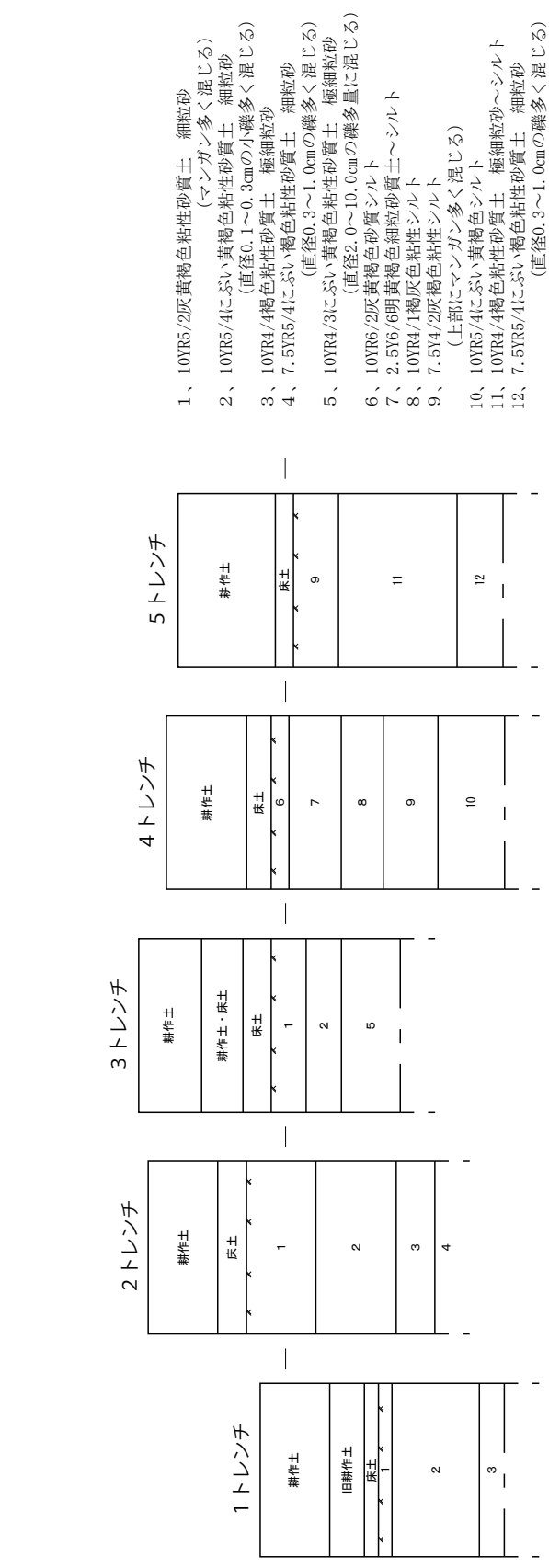
第１項　調査に至る経緯・経過

調査の経緯

本調査は、府営農村総合整備事業「伏見堂地区」に伴うものである。この調査は令和元年度に行われた試掘・確認調査に続くものであり、令和３年２月に行われた。

発掘作業

事業に伴い切土が予定される箇所に、5m × 1m 程度の調査区を 10 箇所設定した（図 20）。調査は人力により現代の耕作土及び遺物包含層をス



1～8トレンチ：床土より下は無遺物層
9・10トレンチ：1層は遺物含む
1層より下は無遺物層

1、10YR5/2灰黄褐色粘性砂質土　細粒砂
（マンガン多く混じる）
2、10YR5/4にぶい黄褐色粘性砂質土　細粒砂
（直径0.1～0.3cmの小礫多く混じる）
3、10YR4/4褐色粘性砂質土　極細粒砂
4、7.5YR5/4にぶい褐色粘性砂質土　細粒砂
（直径0.3～1.0cmの礫多く混じる）
5、10YR4/3にぶい黄褐色粘性砂質土　極細粒砂
（直径2.0～10.0cmの礫多量に混じる）
6、10YR6/2灰黄褐色砂質シルト
7、2.5Y6/6明黄褐色細粒砂質土～シルト
8、10YR4/1褐灰色粘性シルト
9、7.5Y4/2灰褐色粘性シルト
（上部にマンガン多く混じる）
10、10YR5/4にぶい黄褐色シルト
11、10YR4/4褐色粘性砂質土　極細粒砂～シルト
12、7.5YR5/4にぶい褐色粘性砂質土　細粒砂
（直径0.3～1.0cmの礫多く混じる）
13、10YR4/2灰黄褐色砂質土　粗粒砂～細粒砂
（上部にマンガン混じる）
14、10YR5/4にぶい黄褐色砂質土　細粒砂～シルト
15、10YR5/2灰黄褐色粘性砂質土に
7.5YR4/1褐灰色粘性砂質土がブロックで混じる
16、2.5Y5/4黄褐色粘性シルト（小礫混じる）
17、2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂質土～シルト
（粗粒砂～小礫混じる）
18、10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト
（粗粒砂～小礫混じる）
19、2.5Y5/3黄褐色粘性シルト（粗粒砂～小礫混じる）
20、10YR6/4にぶい黄橙色粘性砂質土
中粒砂～細粒砂（直径0.2～1.0cmの礫混じる）
21、7.5YR4/3褐色粘性砂質土　細粒砂
（直径0.2～1.0cmの礫少し混じる）
22、2.5Y4/1黄灰色粘性細粒砂質土と
2.5Y5/4黄褐色粘性細粒砂質土の混合土
（上部にマンガン混じる）
23、2.5Y6/4にぶい黄色粘性砂質土　細粒砂
（直径1.0cm程度の小礫混じる）

図21　各トレンチ土層柱状図

コップや鋤簾などを使用して掘削した。遺構の検出は主に草削り及び移植ゴテを使用した。

調査区の掘削と並行して、平板測量を行い調査区位置の図面を 100 分の 1 で作成した。それに加え、土の堆積状況を示す土層断面図をエスロンテープやメジャーを用いて作成した。

写真撮影

各調査区で全景写真を撮影するとともに、堆積状況の確認や構造分析のための断面写真を撮影した。撮影機材はデジタルカメラ（APS-C センサー）を使用した。

第２項　調査成果

１～３トレンチ

基本層序は現代耕作土の下にマンガンの多く混じる灰黄褐色粘性砂質土層、黄褐色粘性砂質土層、褐色または黄褐色粘性砂質土層､褐色砂礫土層である｡いずれの調査区でも遺構･遺物は確認できなかった。

４・５トレンチ

４トレンチと５トレンチで土層が異なっており、４トレンチは現代耕作土の下に灰黄褐色砂質シルト層、明黄褐色砂質～シルト層、褐灰色粘性シルト層、上部にマンガンが混じる灰褐色粘性シルト層で、その下は基盤層と思しき黄褐色シルト層となる。一方の５トレンチは現代耕作土の下に灰褐色粘性砂質土層、褐色粘性砂質土層、褐色砂質土層である。いずれの調査区でも遺構・遺物は確認できなかった。

６～８トレンチ

基本層序は現代耕作土の下に黄色系の砂質土層、にぶい黄褐色砂質土層、黄褐色粘性シルト層である。７トレンチの灰黄褐色粘性砂質土には上部に大礫が混入している。いずれの調査区でも遺構・遺物は確認できなかった。

９・10 トレンチ

基本層序は現代耕作土の下に遺物包含層である黄色系の粘性砂質土層、基盤層である褐色または黄色の粘性砂質土層となる。いずれの調査区でも遺構は確認できなかったが、遺物は中世の瓦器及び土師器などが出土した。

第３項　総括

今回の調査では、いずれのトレンチでも遺構は確認できなかったが、９・10 トレンチで遺物包含層を確認した。また明確な基盤層を確認できたのは４・９・10 トレンチのみであった。基盤層は黄褐色、褐色、にぶい黄色の粘性砂質土である。他の調査区では無遺物層はあるものの、基盤層と認められる層は確認できず、土地の改良が以前におこなわれている可能性がある。

第４章　発掘調査の調査成果

第１節　基本層序

調査地は、近年まで果樹園が営農されており、地表面は T.P.+85.4m 前後でほぼ平坦になっている。基本層序は現代の耕作土、旧耕作土、床土、遺物包含層、基盤層である（図 22)。遺物包含層は薄く、調査区の場所によっては検出できないところもあった。基盤層はにぶい黄褐色シルト層（10YR5/3）が主体であるが、調査区西側ではこの層を確認できず、４～ 15cm 大の礫を多く含むにぶい黄褐色シルト層（10YR5/3）となる。これらの基盤層上面で中世の遺構を確認した。旧地形は調査区の東側から西側、つまり嶽山から石川に向けてわずかに傾斜している。調査区西側で基盤層が礫層に変化するのも自然地形にしたがって変化するものと考えられる。

第２節　検出した遺構

掘立柱建物 01（図 24）

調査区北西で検出した、柱穴 001・002・004・006・010 で構成される掘立柱建物である。建物の西側は調査区外に及ぶため全形は不明である。現状の規模は南北 1.7m、東西 1.5m である。建物の東西軸は北に約 13°振る。柱穴の中心間の距離は東西の柱間が 1.1 ～ 1.3m、南北の柱間が 0.9 ～ 1.2m を測る。柱穴の平面形は円形で、大きさは 20 ～ 60cm を測る。深さは３～ 20cm と幅があるが、北列の柱穴は浅く、南列の柱穴は深い傾向がある。このことから北側は削平を受けている可能性が高い。遺物は柱穴 002・004・010 から土師器椀及び瓦器が出土しており、中世に属すると判断する。

掘立柱建物 02（図 24）

調査区南西で検出した、柱穴 018・021・027・035・041 で構成される掘立柱建物である。現状の規模は南北 3.0m、東西 2.0m である。建物の西側は調査区外に及ぶため全形は不明である。建物の東西軸は北に約 18°振る。柱穴の中心間の距離は東西の柱間が 1.7 ～ 1.9m、南北の柱間が 1.1 ～ 1.2m を測る。柱穴の平面形は円形で、大きさは 20 ～ 40cm、深さは 12 ～ 26cm を測る。遺物は柱穴 027・035 から土師器及び瓦器椀が出土しており、中世に属すると判断する。

掘立柱建物 03（図 25）

調査区中央北寄りで検出した、柱穴 051・052・058・060・066・070・072・085・092・101・134 で構成される掘立柱建物である。建物の規模は３間×２間と考えられ、東西 3.6m ×南北 4.3m で面積 15.5㎡を測る。また建物内には井戸 050 が存在する。建物の東西軸は北に約 14°振る。柱穴の中心間の距離は東西の柱間が

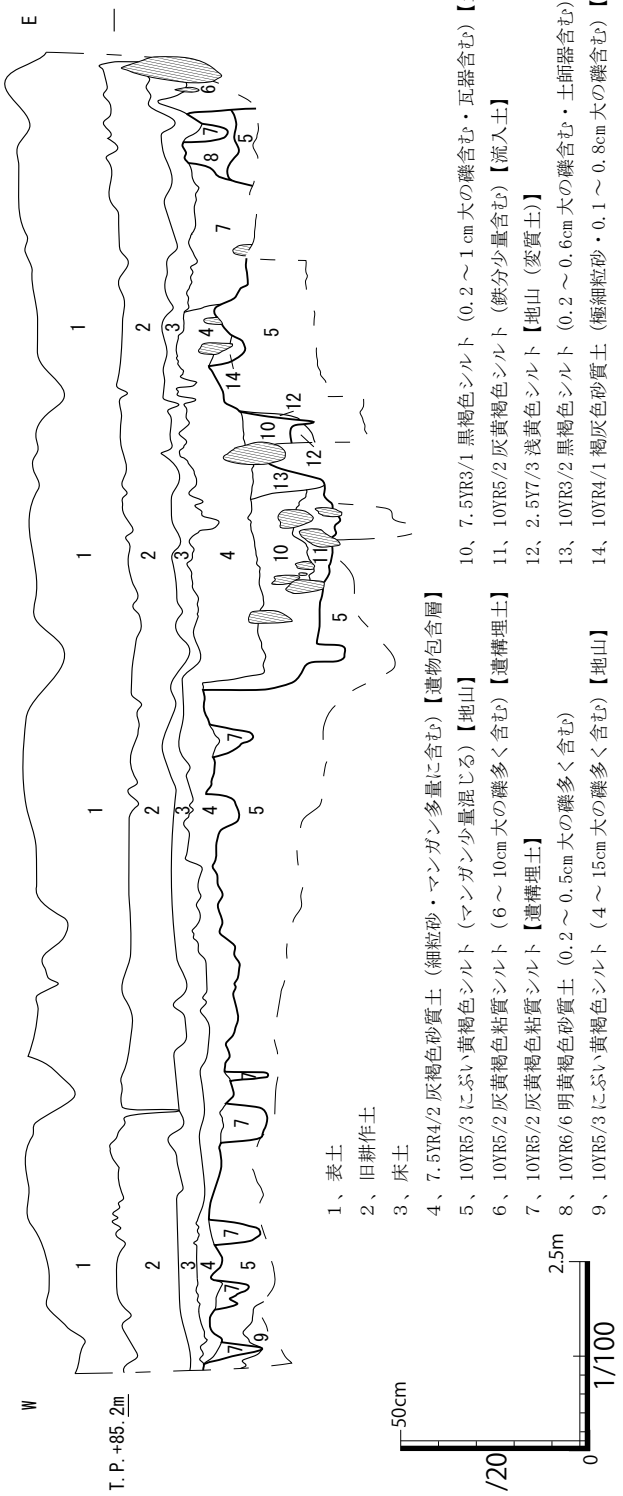


図 22　北壁土層断面図

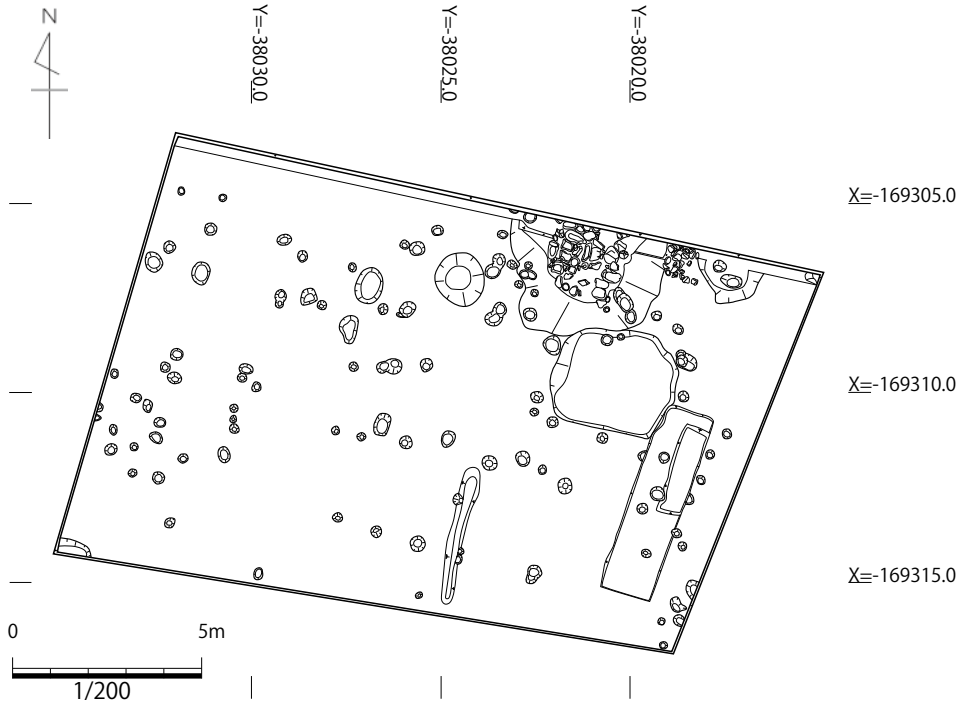


図 23　調査区平面図

1.8 ～ 2.1m、南北の柱間が 1.5 ～ 1.7m を測る。柱穴の平面形は円形で、大きさは 30 ～ 50cm、深さは 10 ～ 23cm を測る。遺物は柱穴 051・060・066・070・072・085・101・134 から青磁・土師器皿・瓦器椀・瓦器皿・羽釜が出土しており、中世に属すると判断する。

井戸 050（図 25）

掘立柱建物 03 の内部で検出した。東西 1.3m、南北 1.4m の楕円形で深さは 1.3m を測る。井戸の底面はさらに下と推測されるが、安全を考慮して掘削を止めた。井戸枠は検出されなかった。埋土の堆積状況から、一定期間使用された後、T.P.+84.1m 付近まで一旦埋め戻され、その後再び埋め戻したと考えられる。遺物は青磁椀・土師器皿・瓦器皿・鉢・須恵器が出土した。須恵器は破片 1 点のみの出土であり、中世の開発で古代の遺構が削平され、２度目の埋め戻しの際に混入したと考えられる。掘立柱建物 03 との切り合い関係は不明だが、出土した遺物から考えると２度目の埋め戻しは掘立柱建物 03 の廃絶と同時期の可能性が高い。

掘立柱建物 04（図 26）

調査区中央南寄りの、掘立柱建物 03 の南側で検出した、柱穴 071・073・076・080・103・113 で構成される掘立柱建物である。建物の規模は 1 間× 2 間と考えられるが、柱穴 077 を含めると南側のみ 3 間となる。東西 4.0m ×南北 2.1m で面積 8.4㎡を測る。建物の東西軸は北に約 15°振る。柱穴の中心間の距離は東西の柱間が 2.0 ～ 2.3m、南北の柱間が 2.4 ～ 2.5m を測る。柱穴 077 を含めた場合、南側の柱間は 1.2 ～ 2.0m となる。柱穴の平面形は円形で、大きさは 20 ～ 40cm、深さは 22 ～ 32cm を測る。遺物は柱穴 073・103 から土師器皿及び土師器が出土しており、中世に属すると判断する。

柱穴 023（図 27）

掘立柱建物 02 の東側で検出した。柱痕跡及び柱掘方埋土に分層できるため、柱穴と判断する。径は東西 23.1 ×南北 25.5cm で深さは 12.0cm を測る。遺物は出土していないため、時期は不明である。

柱穴 054（図 27）

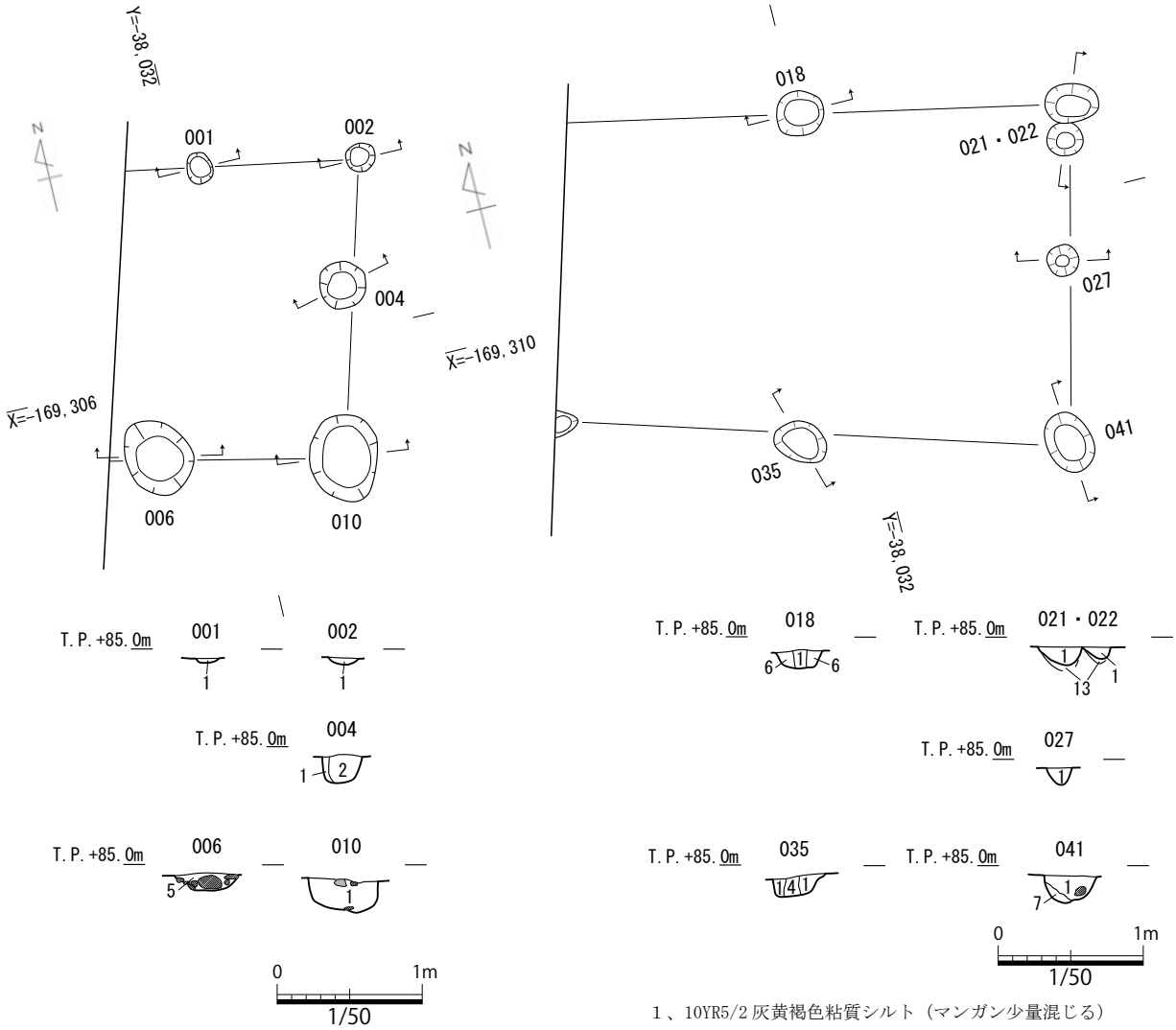


図 24　掘立柱建物 01・02 平面・断面図

掘立柱建物 03 内部の北側で検出した。柱痕跡及び柱掘方埋土に分層できるため、柱穴と判断する。径は東西 21.9 ×南北 19.8cm で深さは 14.0cm を測る。遺物は出土していないため､時期は不明である。

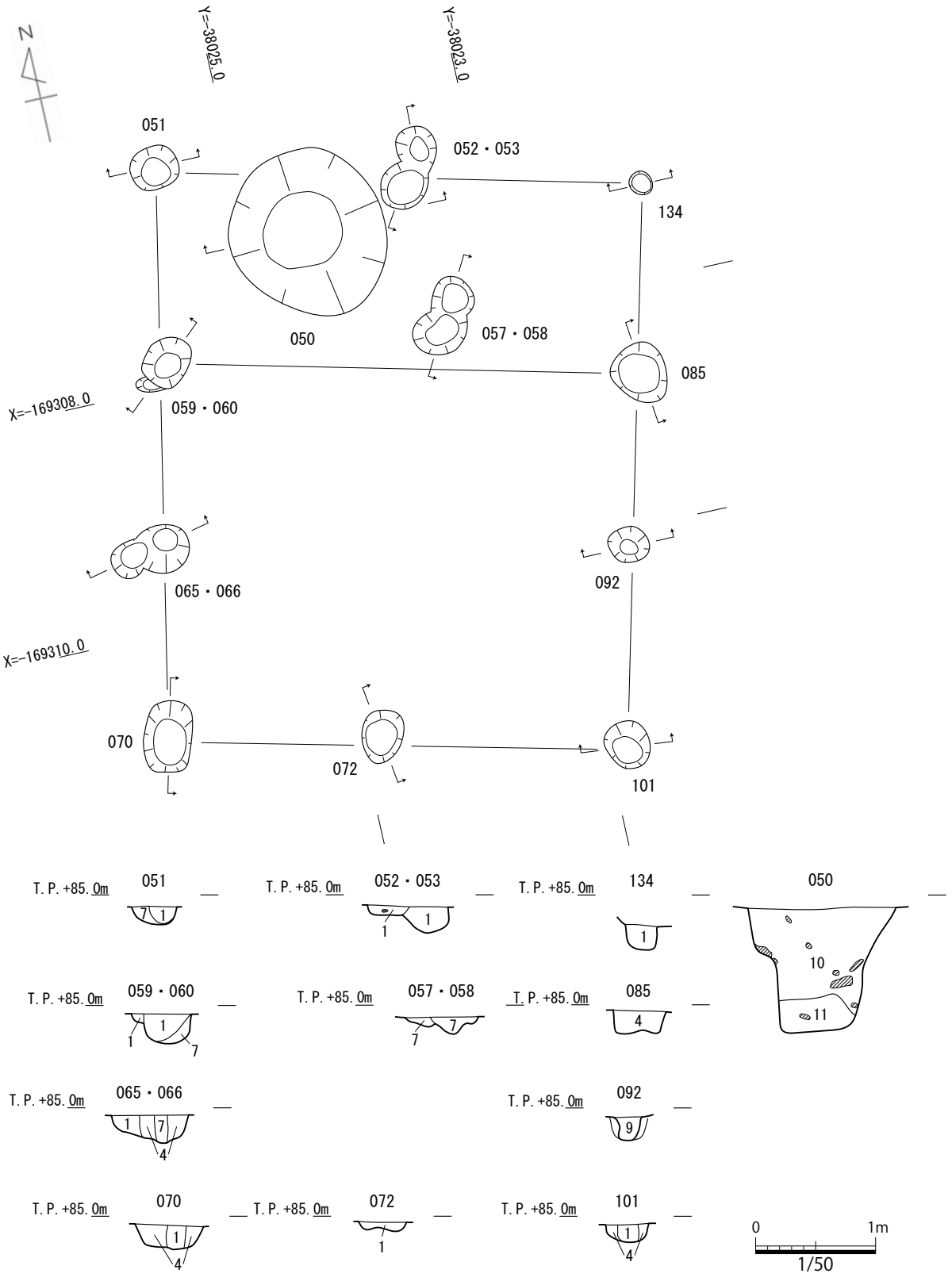
柱穴 074（図 27）

掘立柱建物 04 内部の中央で検出した。柱痕跡及び柱掘方埋土に分層できるため、柱穴と判断する。後世の溝により一部が削平されているが、径は南北 36.0cm で深さは 20.0cm を測る。遺物は出土していないため、時期は不明である。掘立柱建物 04 の柱となる可能性もある。

柱穴 096（図 27）

掘立柱建物 04 の北東で検出した。柱痕跡及び柱掘方埋土に分層できるため、柱穴と判断する。試掘トレンチにより一部が削平されているが、径は南北 24.5cm で深さは 14.0cm を測る。遺物は瓦器が出土しており、中世に属すると判断する。

柱穴 121（図 27）



1、10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト（マンガン少量混じる）
4、1 に 13 が 20%混じる
7、1 に 13 が 40%混じる
9、13 に 1 が 40%混じる
10、10YR4/4 褐色シルト（直径５～ 20cm 大の礫混じる）
11、10 に 10YR6/6 明黄褐色シルトが 20%混じる
13、10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（マンガン少量混じる）

図 25　掘立柱建物 03 平面・断面図

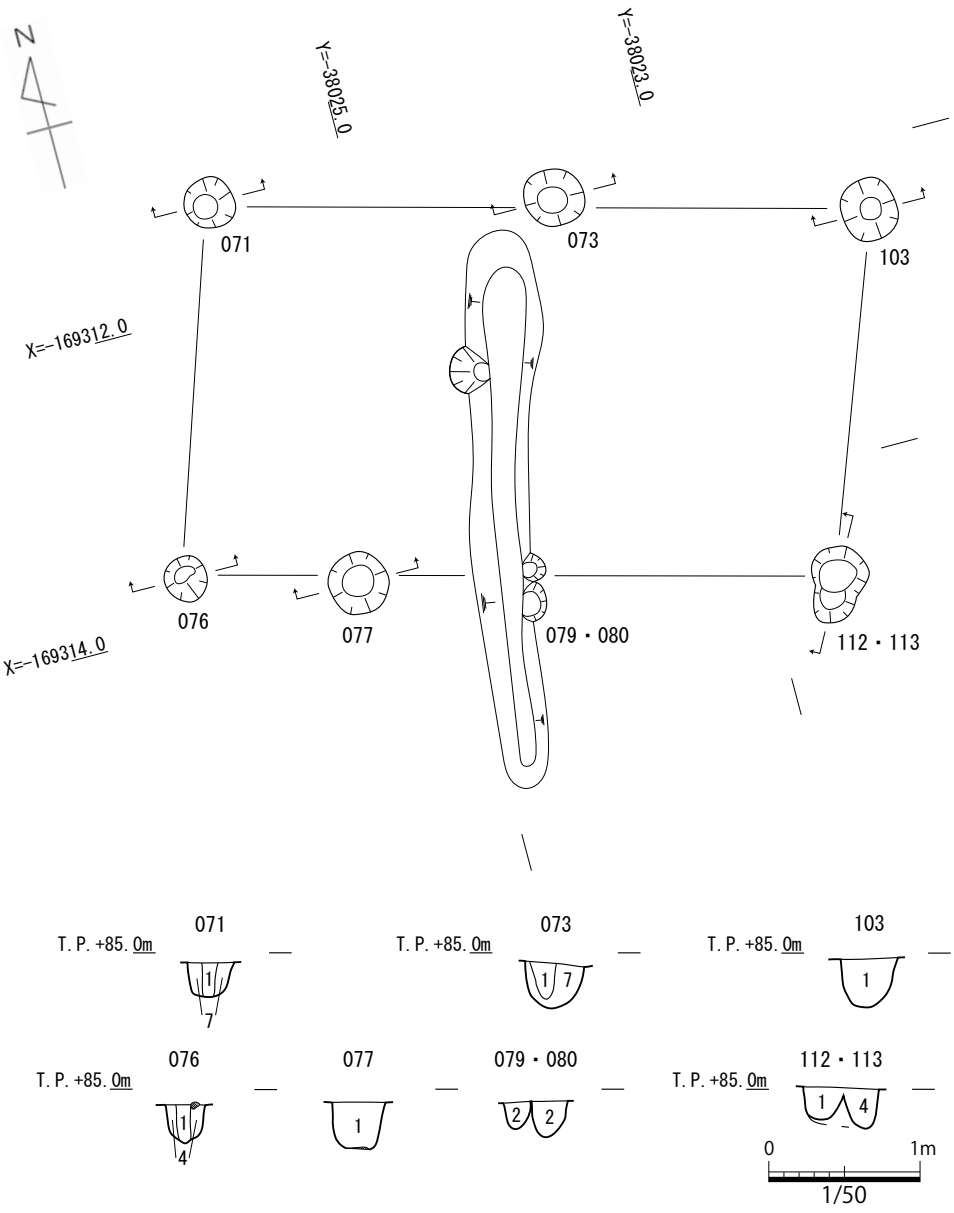
調査区南東で検出した。柱痕跡及び柱掘方埋土に分層できるため、柱穴と判断する。試掘トレンチにより一部が削平されているが、径は東西 25.7 ×南北 23.4cm で深さは 19.0cm を測る。遺物は出土していないため、時期は不明である。

柱穴 132（図 27）

調査区北東で検出した。柱痕跡及び柱掘方埋土に分層できるため、柱穴と判断する。径は東西 34.7 ×南北 46.1cm で深さは 16.0cm を測る。遺物は土師器及び瓦器が出土しており、中世に属すると判断する。

小土坑 086・087・088（図 27）

調査区北東で検出した。087 の径は東西 29.8 × 南北 27.6cm で深さは 21.0cm を測る。088 の復元径は東西 57.0 ×南北 39.4cm で深さは 19.0cm を測る。086 は 087 に削平されているため径は不明である。遺物は瓦器椀及び土師器が出土しており、中世に属すると判断する。087 が柱痕跡で 088 が柱掘方埋土の柱穴となる可能性がある。



１、10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト（マンガン少量混じる）
２、１に 7.5YR4/6 褐色シルト 20%混じる
４、１に 13 が 20%混じる

図 26　掘立柱建物 04 平面・断面図

小土坑 107（図 27）

調査区南東で検出した。径は東西 28.4 ×南北 27.9cm で深さは 15.0cm を測る。遺物は瓦器椀が出土しており、中世に属すると判断する。柱穴となる可能性もある。

土坑 055（図 27）

調査区中央西寄りで検出した。東西 73.2、南北 95.0cm の楕円形で深さは 18cm を測る。遺物は土師器及び瓦器椀が出土しており、中世に属すると判断する。

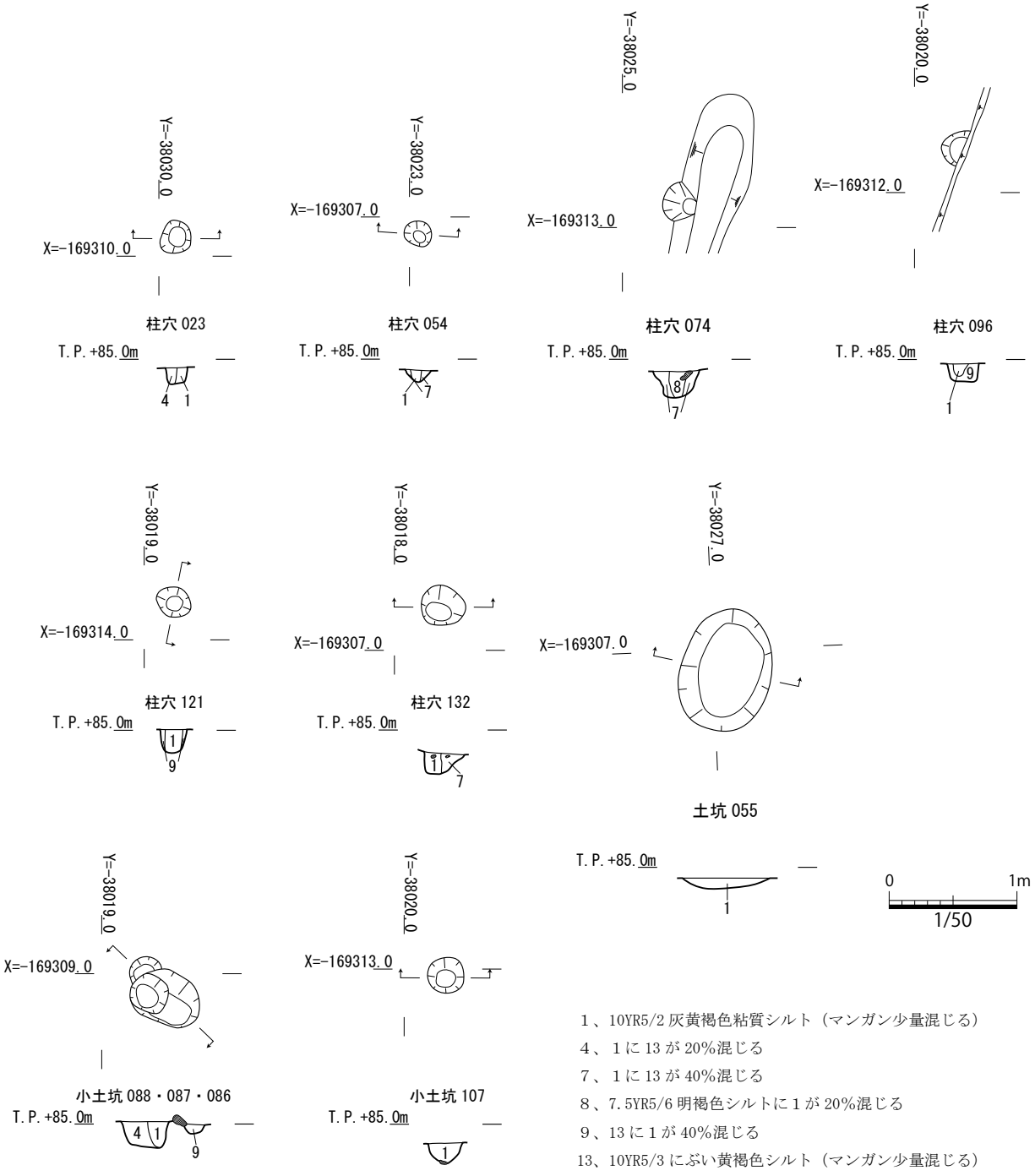


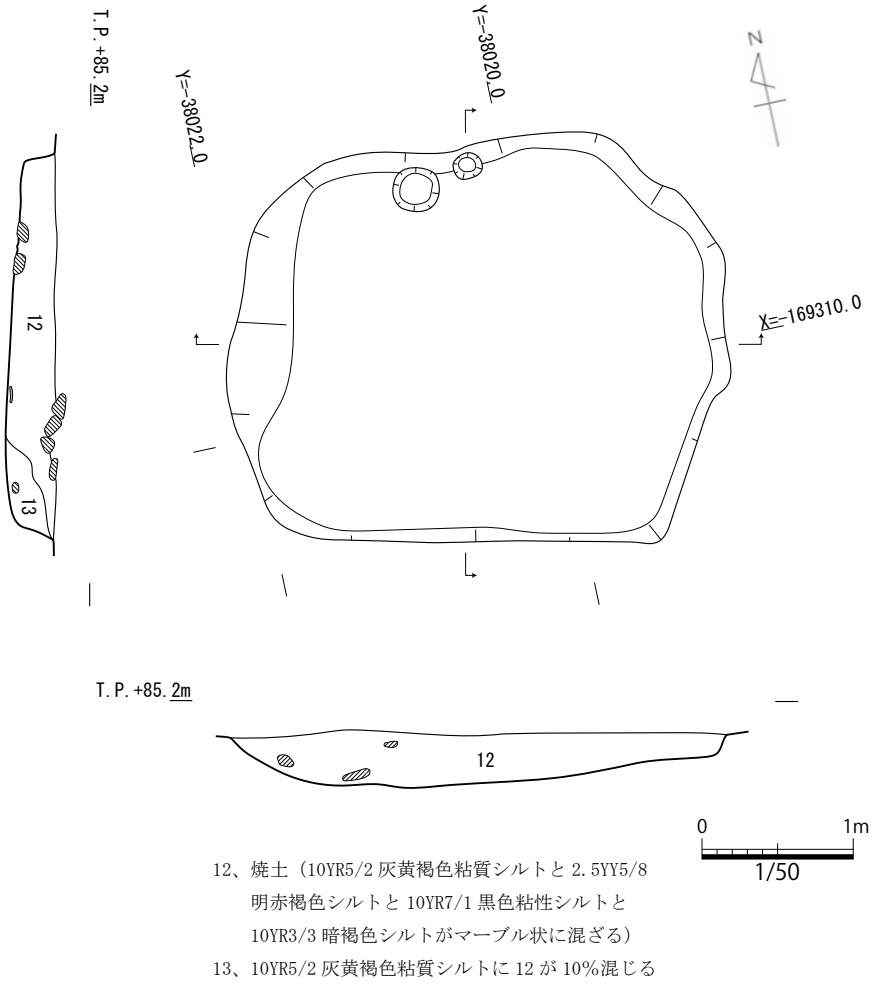
図 27　柱穴・小土坑・土坑平面・断面図

焼土充填土坑 100（図 28）

調査区の北東、掘立柱建物 03 の東側で検出した。東西 3.3m、南北 2.7m の角丸方形で、深さは 18 ～ 36cm を測る。埋土は焼土や炭化物、周辺土壌がブロック状に混じっている。また遺構の埋土には 10 ～ 20cm 大の礫が含まれている。埋土に焼土が混じっているものの、土坑の底面や壁面は焼けていない。遺物は青磁椀・土師器皿・瓦器椀・羽釜・鉢・備前甕・瓦が出土した。埋土の様相や遺物の出土状況から、周囲の掘立柱建物が廃絶した時期に土坑が掘削され、焼土や礫、遺物が充填された可能性が高い。

不明遺構 122（図 29）

調査区の北東で検出した。東西 4.2m で深さ 12cm の土坑を掘削したのち、中央に東西 2.2m で深さ６～８cm の浅い土坑を再度掘削している。中央の浅い土坑の中には礫を充填しており、遺構東側の縁にも小礫を敷いている。遺構は調査区北側へ続くため、遺構の全形は不明である。中央に充填された礫は長径が 16 ～ 58cm と地山の礫よりも大型の円礫を使用している。一方、東縁の礫は長径 13 ～ 27cm と中央の礫より小ぶりな円礫を使用している。埋土は土坑の埋土２層と大型円礫の下の埋土に分かれる。また土坑内では小土坑を複数検出しており、覆い屋が立っていた可能性もある。遺物は土坑の埋土から土師器皿・瓦器椀・鉢・瓦が出土している。また大型円礫の下の埋土からは瓦器椀が出土している。



12、焼土（10YR5/2 灰黄褐色粘質シルトと 2.5YY5/8 明赤褐色シルトと 10YR7/1 黒色粘性シルトと 10YR3/3 暗褐色シルトがマーブル状に混ざる）
13、10YR5/2 灰黄褐色粘質シルトに 12 が 10%混じる

図 28　焼土充填遺構 100 平面・断面図

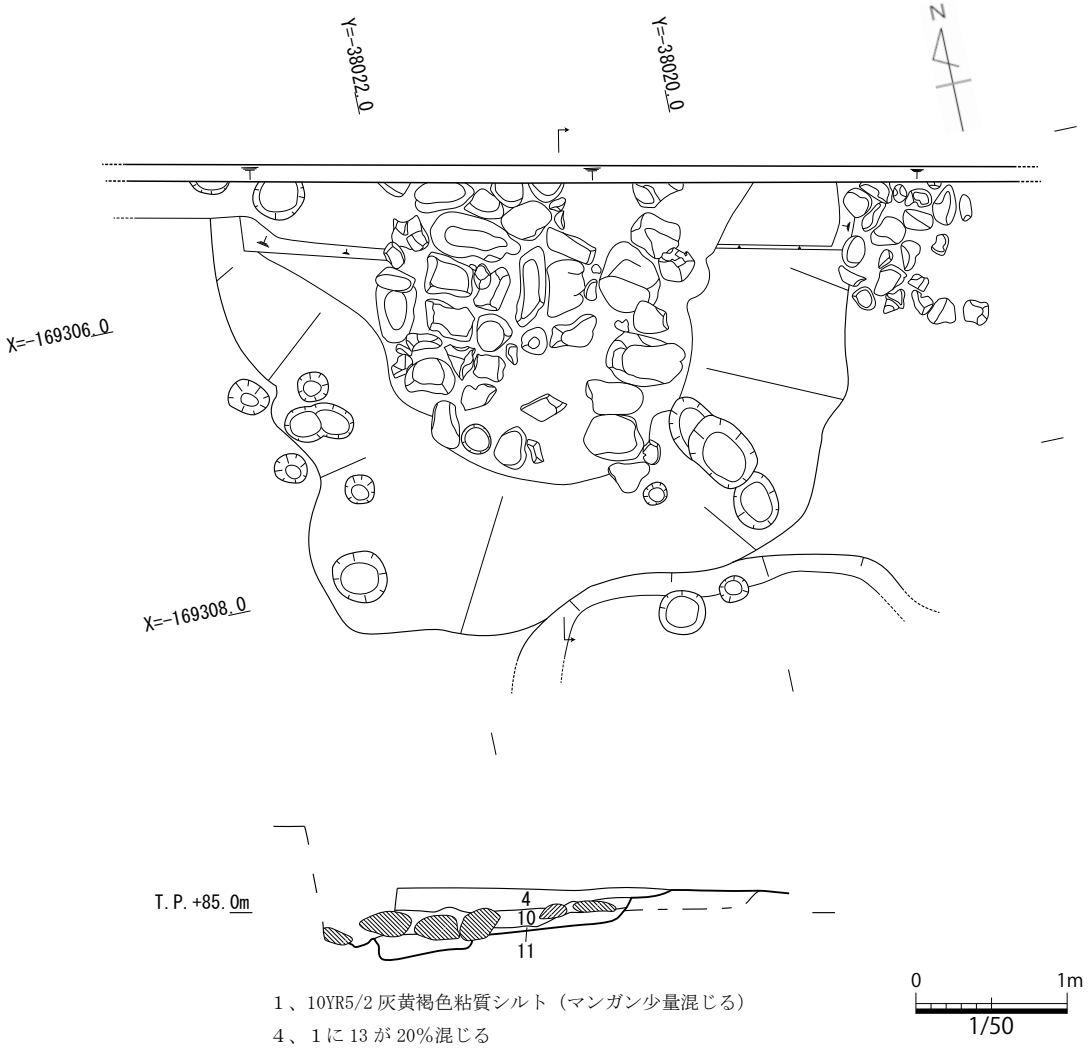
第３節　出土遺物

第４層（図 30）

１は土師器皿である。２は瓦質土器の椀である。断面が低い角丸台形の高台を貼り付けている。３・４は土師質の羽釜である。３は口縁部から鍔部まで残存する。鍔部の下面は黒変している。４は鍔部のみ残存する。小片のため径の復元はできなかった。５は瓦質土器の鉢である。注ぎ口が半分だけ残存している。６は中世須恵器の鉢である。これらの土器は概ね 12 世紀末から 13 世紀の特徴を持つ。

７・８は須恵器の杯蓋である。双方とも回転台から外した跡が未調整で凹凸が激しい。７は焼成が不良で灰色を呈する。８は外面に矢印状のヘラ記号が施されている。９は器種不明須恵器である。胴部の外面調整にカキメを施す。平底であることから壺もしくは平瓶の可能性が高い。10 も器種不明須恵器の底部である。壺もしくは甕の可能性がある。11 は土師器の甕である。外面の一部に煤がつく。７・８は西弘海氏の飛鳥編年Ⅰ期（６世紀末～７世紀前葉）の特徴を持ち、それ以外の土器も概ねこの時期に属すると考えられる。

掘立柱建物・井戸・小土坑（図 31）



１、10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト（マンガン少量混じる）
４、１に 13 が 20%混じる
10、10YR4/4 褐色シルト（直径５～ 20cm 大の礫混じる）
11、10 に 10YR6/6 明黄褐色シルトが 20%混じる
13、10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（マンガン少量混じる）

図 29　不明遺構 122 平面・断面図

12 は掘立柱建物 01 の柱穴 010 から出土した瓦質土器の椀である。断面がやや低い三角形状の高台を貼り付けている。13 は掘立柱建物 02 の柱穴 035 から出土した瓦質土器の椀の底部である。断面が低い台形の高台を貼り付けている。調整は見込みに平行線状のミガキを施す。14 は掘立柱建物 03 の柱穴 134 から出土した瓦質土器の椀である。15 ～ 18 は井戸 050 から出土したものである。15 ～ 17 は土師器皿である。15 の口縁は横方向に延びるが、16 と 17 は上方向に延びる。また 17 は器高が 3.1cm でやや深い。18 は瓦質土器の椀である。19 は掘立柱建物 05 の柱穴 073 から出土した土師器皿である。器高は 3.0cm でやや深い。20・21 は小土坑 086-088 から出土した瓦質土器の椀である。20 は断面が三角形状の高台を貼り付けている。調整は外面に横方向のミガキがわずかに残る。21 は断面が三角形状の高台を貼り付けている。22 は土坑 090 から出土した土師器皿である。焼成は瓦質に近い。調整は見込みに平行線状のミガキを施す。23 は小土坑 107 から出土した瓦質土器の椀である。断面が三角形状の高台を貼り付けている。調整は見込みに斜格子状のミガキを施す。これらの土器は 12 世紀後葉から 13 世紀中葉ごろまでの特徴を持つ。

焼土充填土坑 100（図 32・33）

24 は青磁の椀である。方形状の高台をもつ。内面と外面の高台にかけて施釉されているが、高台の内側から底面にかけては施釉されておらず露胎している。文様は椀の表面を削ることで、釉薬の濃淡を作り出して施文している。外面には色の濃淡を漸次的に変化させて縦方向の線を描いている。内面には見込みに沿って円を描き、円の内部に花弁を少なくとも３枚描いている。25 ～ 31 は土師器皿である。28 は口縁部が僅かに外反している。31 の調整は見込みに圏線状のミガキを施す。32 ～ 43 は瓦質土器の椀である。32 は断面が半円形状の極めて低い高台を貼り付けている。33 は断面が三角形状の極めて低い高台を貼り付けている。調整は内面及び見込みに圏線状のミガキを施す。34 の調整は内面に圏線状のミガキを施すほか、見込みに圏線状及び直線状のミガキを施す。35・36・38・39 の調整は内面及び見込みに圏線状のミガキを疎らに施す。44 は瓦質土器の羽釜である。45 は瓦質土器の甕である。外面をタタキで成形したのち、調整のミガキを施している。46 は瓦質土器の鉢である。注ぎ口を持つ。調整は外面にケズリを施している。47 も瓦質土器の鉢である。調整は外面にケズリを施している。48 は陶器の大甕である。口縁部を屈曲させ、受け口状の口縁を成形している。調整は外面、内面ともケズリを施している。49 は丸瓦である。幅 16.6cm を測る。凹面には布目が残る。また端部にはケズリを施す。50 は平瓦である。凸面にはタタキ痕があり、凹面には布目が残る。

これらの土器の中で瓦質土器の椀は概ね 13 世紀中葉の特徴を持つ。これは前述した柱穴や小土坑から出土した瓦質土器の椀よりも時期が新しい傾向を示している。一方で 24 の青磁の椀は高台の形態や

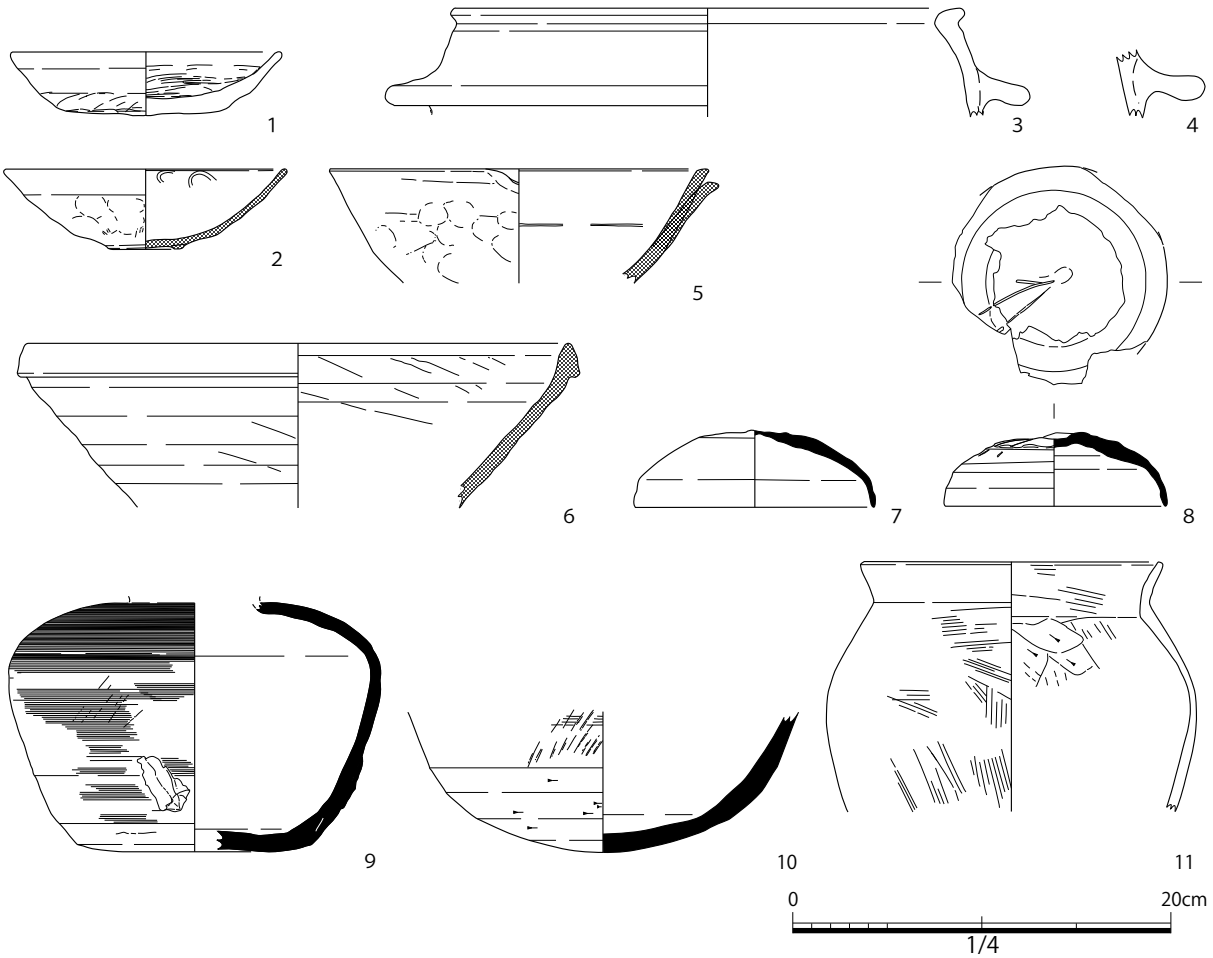


図 30　第４層出土遺物

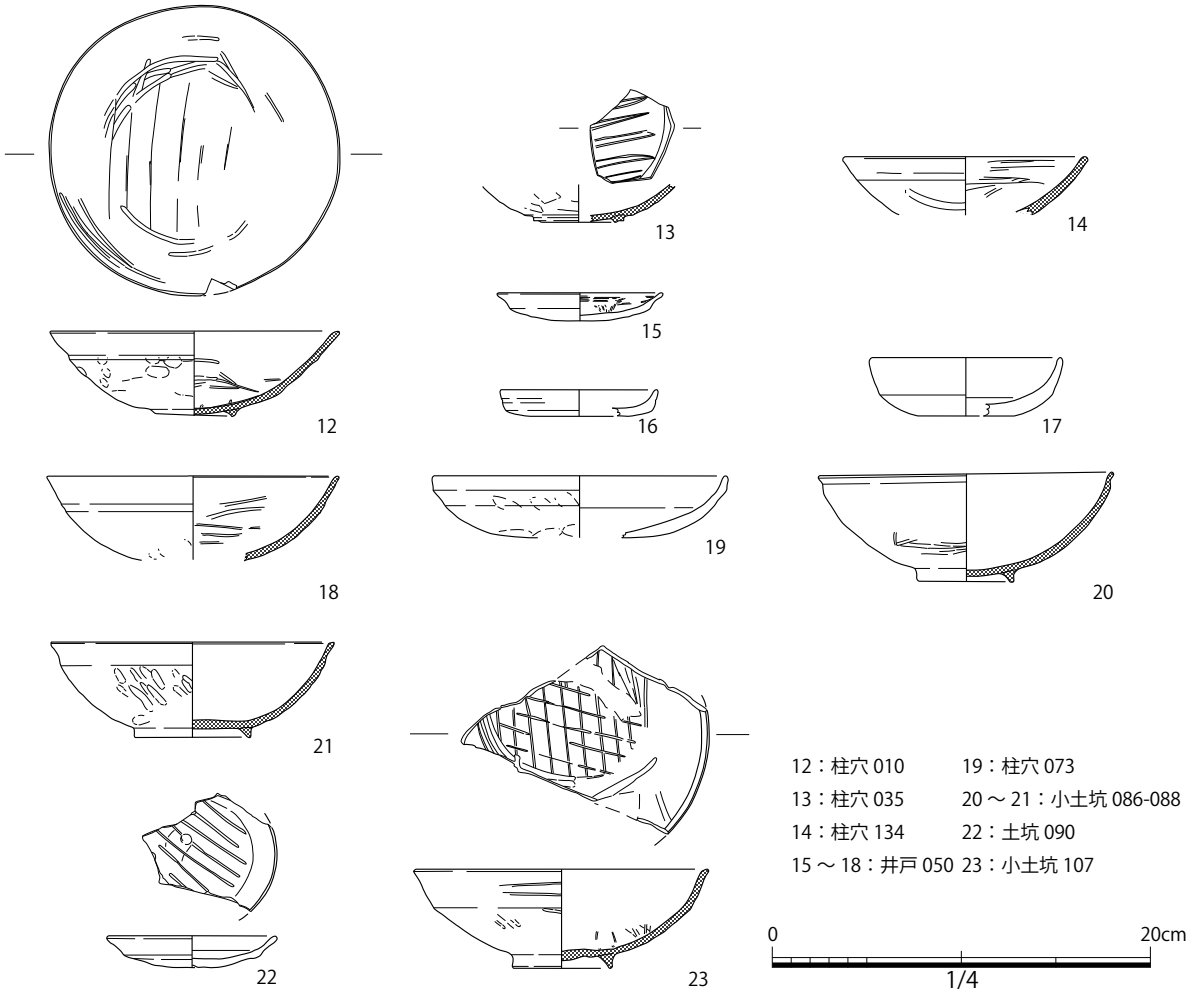


図 31　掘立柱建物・井戸・小土坑出土遺物

文様、釉薬のかかり方から 12 世紀から 13 世紀前葉のものと考えられる。また 50 の平瓦はタタキ痕や布目が確認できることから 12 世紀末頃の特徴を持つ。これらは柱穴や小土坑から出土している土器と同様の時期であり、同じ焼土充填土坑 100 から出土している瓦質土器とは若干時期に相違がある。

不明遺構 122（図 34・35）

51 は土師器皿である。52・53 は瓦質土器の椀である。52 は断面が半円形状の極めて低い高台を貼り付けている。口縁部が若干ひずんでいる。54 は瓦質土器の鉢である。調整は外面にケズリ、内面にミガキを施す。55･56 は瓦である。55 の外面には縄目が確認できる。内面にはユビナデが施されている。56 の外面には縦横方向の線が確認でき、格子タタキの可能性がある。内面には布目が確認できる。これらの土器は概ね 13 世紀代の特徴を持つ。

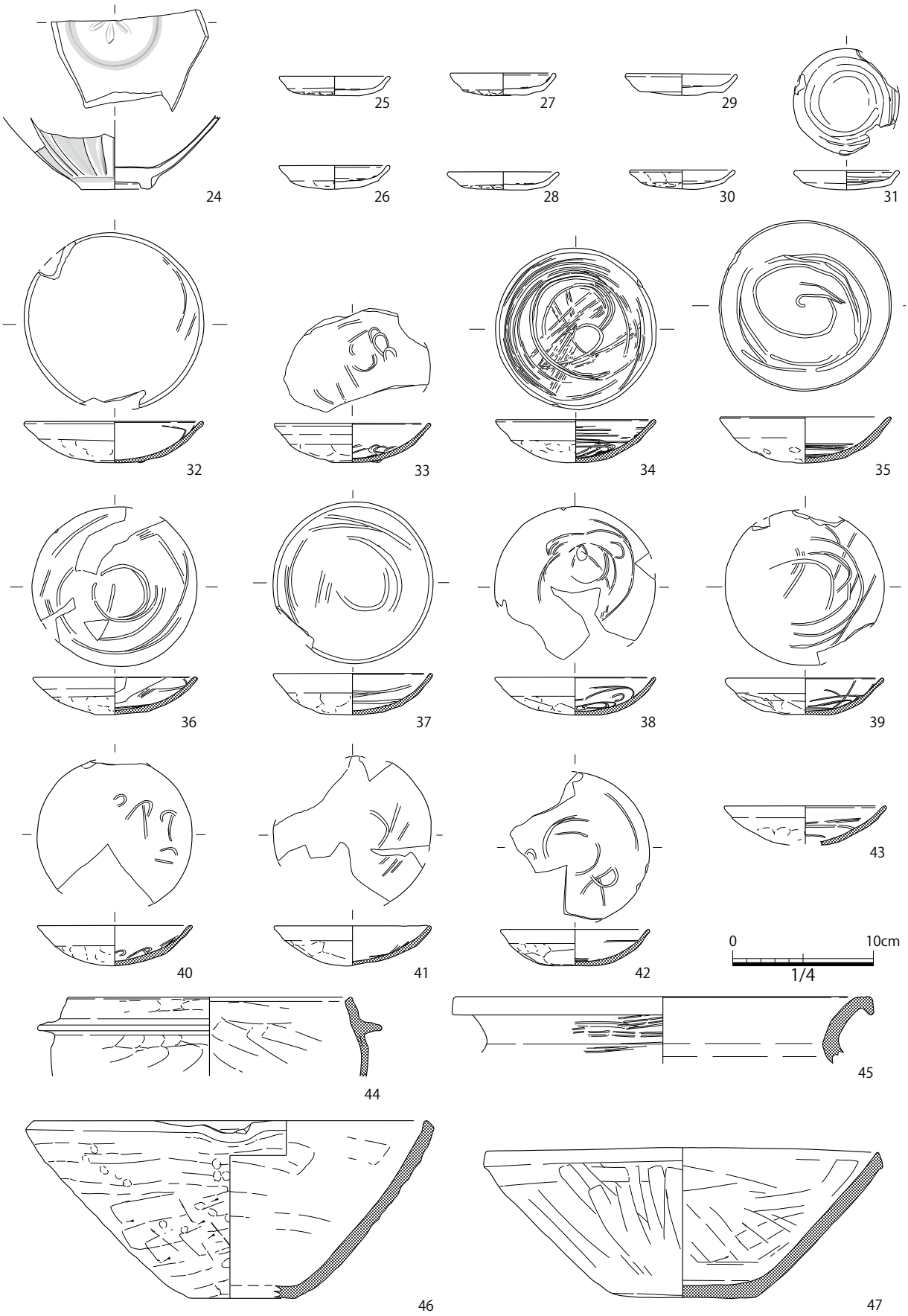


図 32　焼土充填土坑 100 出土遺物その 1

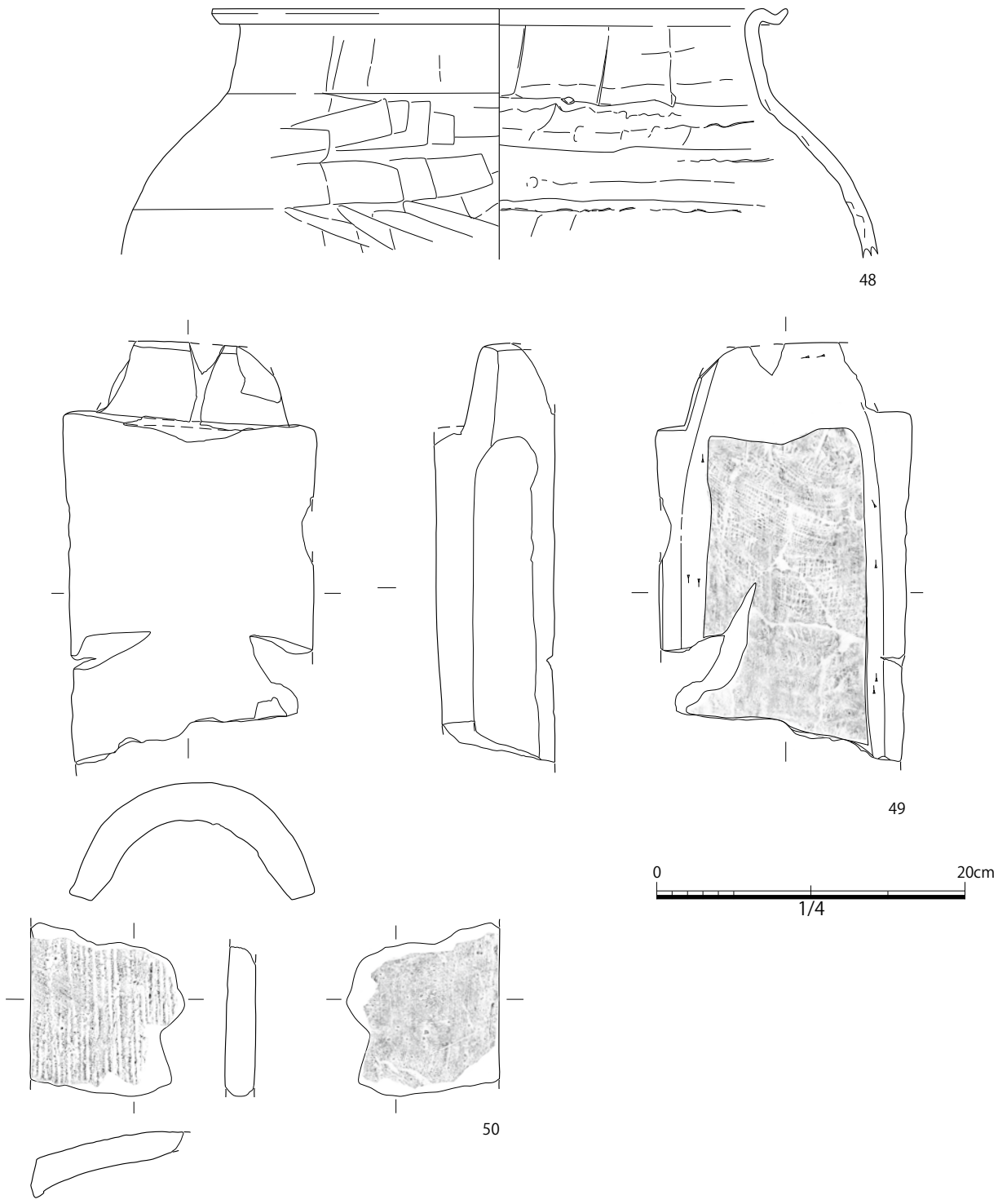


図 33　焼土充填土坑 100 出土遺物その 2

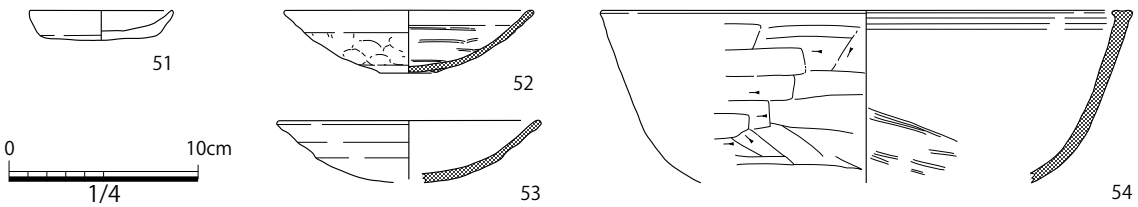


図 34　不明遺構 122 出土遺物その 1

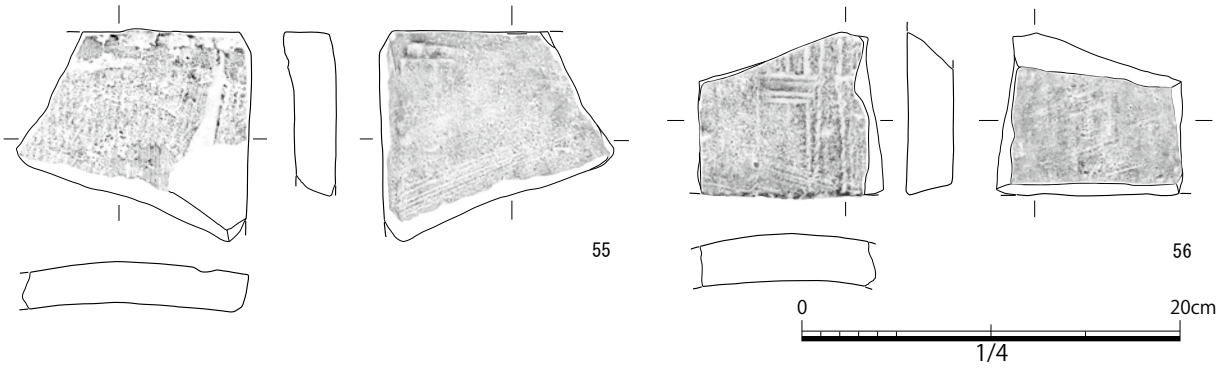


図 35　不明遺構 122 出土遺物その 2

第 5 章　自然科学分析

第 1 節　土坑埋土の水洗作業

第 1 項　はじめに

西野々遺跡で採取された土坑埋土の水洗選別を行い、微細な遺物等（土器片、木材片、炭化材片、植物遺体、炭化植物遺体、骨片、鉄片等）の抽出を行った。なお、今回の作業において、炭化種実が抽出されたため、同定も併せて行った。

第 2 項　試料と方法

分析試料は、焼土充填土坑 100 から採取された堆積物 4 試料と、不明遺構 122 から採取された堆積物 2 試料の、計 6 試料である。試料の水洗は、パレオ・ラボにて行った。試料の詳細を表 1 に示す。

水洗方法については、基本的に 2.0mm 目の篩で水洗を行ったが、粒径の細かい遺物の包含状況を確認するために、一部の堆積物を 0.5mm 目の篩で水洗した。以下に、試料ごとの水洗方法を示す。

焼土充填土坑 100 中央部の堆積物については、500cc を最小 0.5mm 目、600cc を最小 2.0mm 目の篩を用いて水洗した。不明遺構 122 の石集中部南側の堆積物については、500cc を最小 0.5mm 目、500cc を最小 2.0mm 目の篩を用いて水洗した。その他の試料については、最小 2.0mm 目の篩を用いて 1050 ～ 3800cc を水洗した。

回収された遺物は、炭化種実、炭化材、土器片･粘土塊に分類した。土器と粘土塊については、8.0mm 以上の大きさの破片を抽出した。

第 3 項　結果

土坑埋土の水洗選別結果を表 1 に示す。抽出した炭化材と土器片・粘土塊の量について、点数の概略を（+）で示した。木質片と骨片、鉄片も抽出対象としたが含まれていなかった。

なお、抽出された炭化種実を同定した結果、草本植物のイネ炭化籾殻・炭化種子（頴果）とオオムギ炭化種子（頴果）の 2 分類群が得られた。このほかに、科以上の詳細な同定ができなかった種実を不明 A 炭化種実とし、残存状態が悪く、微細な破片であるため識別点を欠く同定不能な一群を同定不能炭化種実とした（表 2）。

以下に、炭化種実の産出傾向を遺構別に記載する（同定不能炭化種実は除く）。

焼土充填土坑 100：イネがわずかに得られた。

不明遺構 122：イネとオオムギ、不明 A がわずかに得られた。

次に、産出した炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名や順番については、米倉・梶田（2003-）に準拠し、APG Ⅲリストの順とした。

（１）イネ　Oryza sativa L.　炭化籾殻・炭化種子（頴果）　イネ科

籾殻は、完形ならば上面観は楕円形で、側面観は長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。残存長 1.5mm、残存幅 0.8mm。種子（頴果）の上面観は両凸レンズ形、側面観は長楕円形。一端に胚が残る。両面に縦方向の２本の浅い溝がある。長さ 4.7mm、幅 2.5mm。

（２）オオムギ　Hordeum vulgare L.　炭化種子（頴果）　イネ科

完形ならば側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る 1 本の溝がある。側面観で最も幅の広い部分が中央付近にある。背面の中央部下端には三角形の胚があるが、残存していない。断面は楕円形である。残存長 3.6mm、幅 3.1mm、厚さ 1.7mm。

（３）不明 A　Unknown A　炭化種実

上面観は両凸レンズ形で、側面観は楕円形。表面は平滑。識別可能な構造はなかった。長さ 2.8mm、幅 1.2mm。

第４項　考察

焼土充填土坑 100 と不明遺構 122 の埋土を水洗した結果、炭化種実と炭化材片からなる炭化植物遺体と、土器片・粘土塊からなる人工遺物が回収された。

炭化種実は、栽培植物のイネとオオムギで、いずれも食用部位の種子が検出された。

調査所見によれば、焼土充填土坑 100 と不明遺構 122 は、人間の生活領域内に形成された可能性が推定されている。遺構の埋土には、ともに炭化材片や土器片・粘土塊が多く含まれ、さらに、イネとオオムギの食用部位である種子も含まれる。炭化材片については、人間の生活領域内という調査所見にもとづくと、燃料材に由来する炭化材も多く含まれている可能性がある。

上記の水洗選別結果と調査所見をふまえると、土坑埋土は、人間によって生活領域内に持ち込まれ、使用された残滓である燃料材など由来の炭化材片や炭化穀類、廃棄された土器片などが散在する当時の地表付近の土壌などを主たる母材としていると推定される。ただし、現段階では、土坑埋土の詳細な層相に関して検討できていないため、堆積過程について不明な点が多く、今後の検討課題である。（バンダリ スダルシャン）

表１　西野々遺跡の土壌試料から抽出された炭化材・遺物

遺構	水洗量（cc） （括弧内はメッシュサイズ）	炭化材	土器片・粘土塊
焼土充填土坑 100（中央部）	500cc（0.5mm） +600cc（2.0mm）	(+++)	(++)
焼土充填土坑 100（南アゼ）	1050cc（2.0mm）	(++)	(+++)
焼土充填土坑 100（西アゼ）	1300cc（2.0mm）	(+++)	(++)
焼土充填土坑 100（北西部）	1200cc（2.0mm）	(+++)	(++)
不明遺構 122（石集中部南側）	500cc（0.5mm） +500cc（2.0mm）	(++++)	(++)
不明遺構 122	3800cc（2.0mm）	(++)	(++)

+:1-9, ++:10-49, +++:50-99, ++++:100-

表２　西野々遺跡から出土した炭化種実（括弧内は破片数）

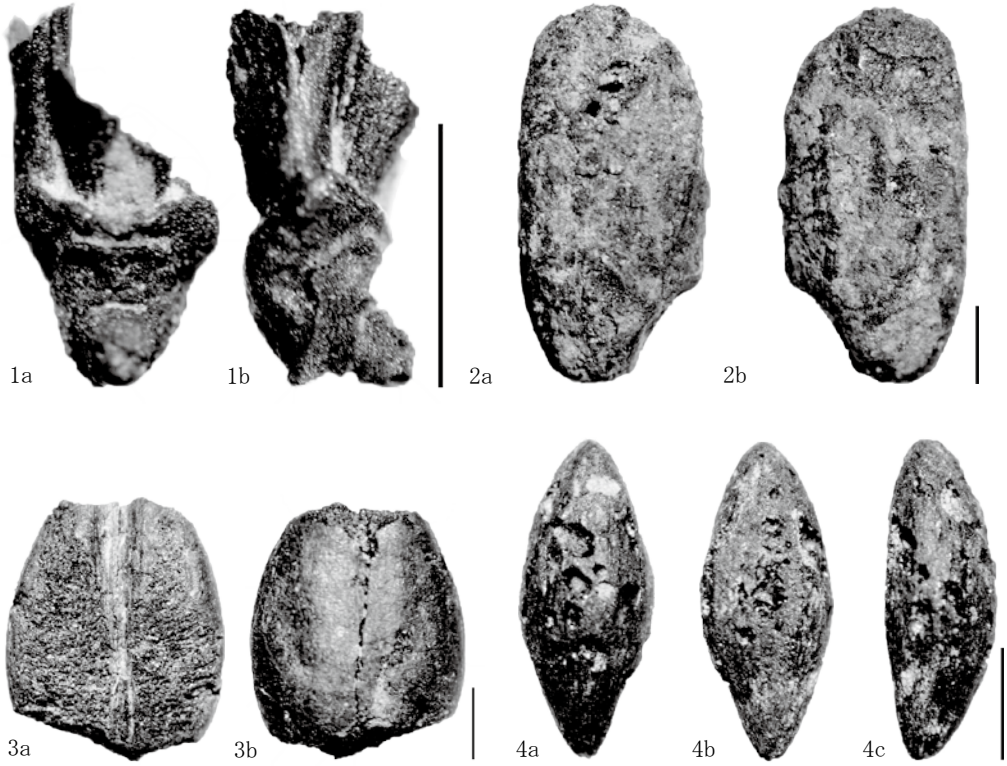
	遺構	焼土充填土坑 100		不明遺構 122			
	出土位置	中央部		石集中部南側		-	
分類群	水洗量（cc） （括弧内はメッシュサイズ）	500（0.5㎜） +600（2.0㎜）		500（0.5㎜） +500（2.0㎜）		3800（2.0㎜）	
イネ	炭化籾殻	4	(+)				
イネ	炭化種子（頴果）			1			(1)
オオムギ	炭化種子（頴果）						(1)
不明 A	炭化種実			1			
同定不能	炭化種実		(7)		(5)		(1)

+:1-9

第２節　放射性炭素年代測定

第１項　はじめに

大阪府富田林市の西野々遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法



スケール 1-4:1㎜

1．イネ炭化籾殻（焼土充填土坑100中央部）、2．イネ炭化種子（頴果）（不明遺構122石集中部南側）、3．オオムギ炭化種子（頴果）（不明遺構122）、4．不明A炭化種実（不明遺構122石集中部南側）

図 36　西野々遺跡から出土した炭化種実

（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

第２項　試料と方法

測定試料の情報、調製データは表３のとおりである。測定試料を図 38 に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第３項　結果

表４に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ 13C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図 39 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.27％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

表３　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
P L D - 43255	焼土充填土坑 100 試料 No. 焼土（南アゼ）	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L） 処理備考：土混じり　ガス化備考：鉱物混じり
P L D - 43256	焼土充填土坑 100 試料 No. 焼土（西アゼ）	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L） 処理備考：土混じり ガス化備考：鉱物混じり

図 37　遺構 100 焼土（左：南アゼ、右：西アゼ）

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.27％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.45％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第４項　考察

測定結果（以下の較正年代は 2 σの値）は、焼土充填土坑 100 の焼土（南アゼ）（PLD-43255）の ^{14}C 年代が 895 ± 15 BP、較正年代が 1050-1080 cal AD (20.74%) および 1153-1218 cal AD (74.71%) で 11 世紀中頃～後半および 12 世紀中頃～ 13 世紀前半、遺構 100 の焼土（西アゼ）（PLD-43256）の ^{14}C 年代が 810 ± 20 BP、較正年代が 1219-1268 cal AD (95.45%) で 13 世紀前半～後半の暦年代を示した。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回試料は、いずれも最終形成年輪が確認できない部位不明の木片である。したがって、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果よりもやや新しい年代であったと考えられる。（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ　伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・辻　康男）

表４　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$(‰)	暦年較正用年代	^{14}C 年代	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
		(yrBP ± 1 σ)	(yrBP ± 1 σ)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-43255 試料 No. 焼土 （南アゼ）	-27.23 ± 0.20	893 ± 17	895 ± 15	1054-1059 cal AD (5.09%) 1157-1180 cal AD (35.87%) 1188-1210 cal AD (27.31%)	1050-1080 cal AD (20.74%) 1153-1218 cal AD (74.71%)
PLD-43256 試料 No. 焼土 （西アゼ）	-28.51 ± 0.23	808 ± 18	810 ± 20	1223-1233 cal AD (21.29%) 1239-1260 cal AD (46.98%)	1219-1268 cal AD (95.45%)

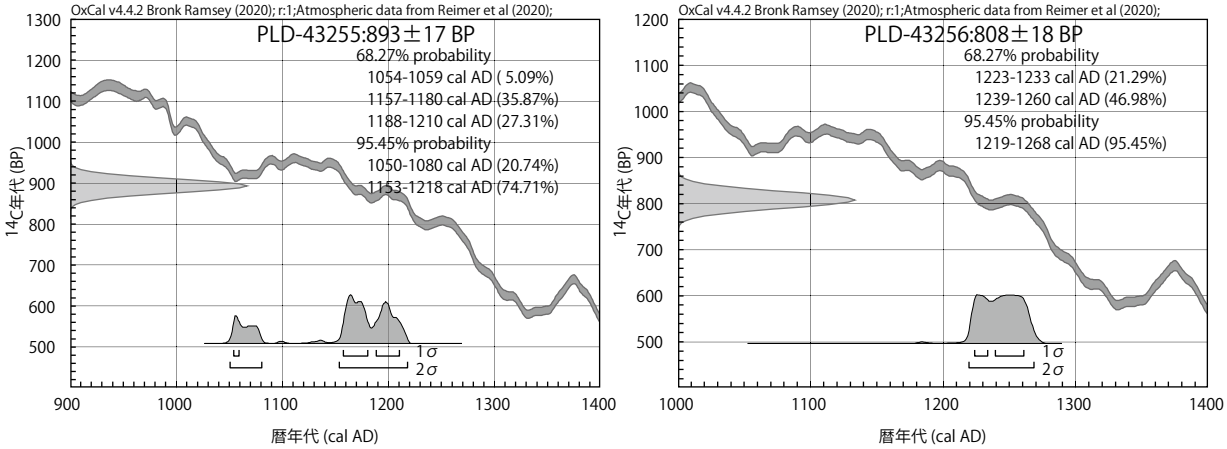


図 38　暦年較正結果

参考・引用文献

米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList），http://ylist.info

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」：3-20，日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., B?ntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., K?hler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)

第６章　総括

今回の調査では、これまでほとんど調査が行われてこなかった富田林市伏見堂周辺を調査することができた。西野々古墳群が西に隣接することから古墳時代や古代に属する遺構・遺物が出土することが想定されたが、調査で確認できたのは中世に属する遺構・遺物がほとんどである。以下簡単ではあるが、中世を中心に調査の成果と当地の様相をまとめたい。

第１節　成果から復元される様相

中世の顕著な遺構として掘立柱建物４棟、井戸、焼土充填土坑を検出した。掘立柱建物は４棟とも東西軸の傾きが概ね揃っており、同一時期に建てられたと考えられる。中でも掘立柱建物 04 は２間×３間と他の建物より大きく、建物内に井戸が存在していた。このことから掘立柱建物 04 はこの建物群の中心であったと想定することも可能である。建物 01・02・03 からはそれぞれ 12 世紀後葉～ 13 世紀前葉の瓦質土器の椀が出土しており、これらの建物群はこの時期までに建てられたと考えられる。

この掘立柱建物 03 の東隣で焼土充填土坑を検出した。当初は鍛冶炉など生産土坑の可能性を疑ったが、土坑の壁面が焼けておらず、肉眼で鉄片などが確認できないこと、埋土に焼土と周辺土壌が入り混じっていることから､別の遺構で生じた焼土を充填した土坑と判断した。またこの土坑の中から青磁椀･土師器皿・瓦器椀・羽釜・鉢・備前甕・瓦と多くの遺物が出土した。このうち青磁椀は貿易陶磁であり 12 世紀後葉～ 13 世紀前葉の特徴を示している。数は少ないながら瓦も出土しており、瓦葺きの建物が存在した可能性が高い。ただし瓦の出土は少数であり、屋根の一部にのみ葺いていたと考えられる。貿易陶磁や、一部とはいえ瓦を葺いた建物が存在していたことは、当地に有力者が存在していたことを示唆している。

次にこの建物群が消滅した時期だが、遺構面の上を覆う包含層である第４層から出土した中世土器の下限は 13 世紀中葉～後葉である。また焼土充填土坑から出土した瓦質土器の椀は 13 世紀中葉の特徴を示しており、この土坑に焼土を充填した時期は 13 世紀中葉前後と考えられる。焼土中の炭化材を放射性炭素年代測定した結果でも、11 世紀中頃～ 13 世紀後半の年代を示している。このことから今回の調査地周辺では 13 世紀中葉～後葉に建物群が廃絶し整地が行われた可能性を指摘できる。

なお今回の調査では、包含層である第４層より西弘海氏の飛鳥編年Ⅰ期（６世紀末～７世紀前葉）の特徴を持つ須恵器が出土した。また井戸の埋土からも須恵器の小片が出土しており、井戸を埋め戻す際に須恵器片が混入したと考えられる。このことから周辺に古代の遺構が存在していたが、中世に削平を受けている可能性が高い。西野々遺跡東側の谷筋にある奥ノ谷１号墳から同時期の須恵器が出土しており、何らかの関係が推測される。

第２節　不明遺構 122 の検討

最後に不明遺構 122 の性格について若干の検討を行う。この遺構はまず土坑を掘削したのち、土坑の中央に浅い土坑を再度掘削している。中央の浅い土坑の中には長径が 16 ～ 58cm の礫を充填している。また遺構東側の縁にも長径 13 ～ 27cm の小礫を敷いている。中央の礫の下には周辺土壌が流入したと思われる土が存在しており､土坑が掘削されたのちやや時間をおいて礫が充填されたと考えられる。また礫の周りには小土坑が検出されており、土層断面の検討からは遺構の埋土と小土坑の埋土が同じと判断したが、前後関係は不明である。この遺構の埋土からは中世の土師器や瓦質土器が出土している。

埋土を専門業者に委託して水洗篩分したが、炭化材や土器片、イネやオオムギなどの炭化種実が抽出できたのみで、金属片や骨片は確認されなかった。

これらの調査及び分析結果から、この不明遺構は①横穴式石室の残骸、②中世墓の残骸、③生産物の仮置き小屋などの可能性が考えられる。①の横穴式石室であった場合、今回検出した遺構は石敷きの石室もしくは羨道の部分となる。ただし古墳時代の遺物は不明遺構 122 から出土していない。②の中世墓であった場合、石組みの墓となる。ただし中世墓を検出すると、鉄釘や蔵骨器、副葬品が遺存している場合が多いが、遺構 122 からそれらの遺物は検出されていない。③の生産物の仮置き小屋であった場合、周囲の小土坑は覆い屋の柱となり、遺構の埋土と小土坑の埋土が同じであることに説明がつく。また焼土充填土坑 100 の焼土を生み出した生産遺構が近くに存在する可能性も高く、仮置き小屋を設置するには好環境といえる。ただし生産物について遺構や遺物から推測することは困難である。また状況証拠から用途を推測したにすぎず、実証性に乏しい。

以上の①～③の可能性を検討したが、どれも根拠に乏しく本書では不明遺構とせざるを得なかった。今後不明遺構 122 の性格を明らかにすることが今回の調査における課題であり、類例を収集したうえで再検討を行うことが必要である。

引用・参考文献

熱田公ほか　1998 『富田林市史』第２巻（本文編Ⅱ） 富田林市役所

北野耕平ほか　1985 『富田林市史』第１巻（本文編Ⅰ） 富田林市役所

小林義孝　1985 「奥ノ谷古墳発掘調査概要」『大阪府文化財調査概要 1984 年度』 大阪府教育委員会

館邦典　1985 「錦織南遺跡発掘調査概要」『大阪府文化財調査概要 1984 年度』 大阪府教育委員会

遺物観察表

掲載番号	遺構・層位	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径・高台径(cm)	その他	色調	胎土	焼成	残存率(%)	備考
1	第4層	土師器	皿	14.1	3.4			内：10YR6/2 灰黄褐色 外：同上 断：10YR7/2 にぶい黄橙色	密（0.5mm 以下長石・雲母含む）	良	60	
2	第4層	瓦質土器	椀	(14.8)	4.25	4		内：5Y8/1 灰白色・N4/1 灰色 外：N4/1 灰色 断：5Y8/1 灰白色	やや密（1mm 以下灰色砂粒含む）	良	95	
3	第4層	土師器	羽釜	(26.6)				内：5YR6/6 橙色 外：7.5YR5/3 にぶい褐色 ・7.5YR3/1 黒褐色 断：5YR6/6 橙色	やや粗（3 ～ 5mm 長石少量・2mm 以下長石・石英含む）	良	10	
4	第4層	土師器	羽釜					内：5YR6/6 橙色 外：5YR6/6 橙色 ・7.5YR5/4 にぶい褐色 断：7.5YR7/4 にぶい橙色	やや粗（3mm 以下白砂粒やや多く含む）	良	5	
5	第4層	瓦質土器	鉢	(20.0)				内：2.5Y7/1 灰白色 外：同上 断：同上	やや粗（3 ～ 4mm 灰色小石粒、2mm 以下灰色砂粒・長石含む）	良	10	
6	第4層	中世須恵器	鉢	(28.6)				内：N7/ 灰白色 外：N7/ 灰白色・N4/ 灰色 断：N7/ 灰白色・N5/ 灰色	密（1mm 以下長石含む）	良	10	
7	第4層	須恵器	杯蓋	(12.7)	4.1			内：2.5Y8/1 灰白色 外：2.5Y7/2 灰黄色 断：2.5Y6/4 にぶい黄色	やや密（3mm の白小石、2mm 以下の白・灰色砂粒含む）	良	70	
8	第4層	須恵器	杯蓋	(11.7)	4.0			内：5Y7/1 灰白色 外：5Y6/1 灰色 断：同上	密（4mm の白小石、2mm 以下の白・灰色砂粒含む）	良	70	
9	第4層	須恵器	平瓶？			(12.4)		内：N5/ 灰色 外：N7/ 灰色 断：5RP7/1 明紫灰色	密（10mm の白小石、2mm 以下の白砂粒含む）	良	30	
10	第4層	須恵器	不明					内：5Y7/1 灰白色 外：同上 断：同上	密（4mm 以下の白・灰色小石・砂粒含む）	良	20	底部のみ
11	第4層	土師器	甕	(15.5)				内：7.5YR5/2 灰褐色 ・7.5YR5/3 にぶい褐色 ・10YR4/2 灰黄褐色 外：同上 断：同上	やや粗（6mm 以下の灰・白・茶色の小石・砂粒多く含む）	良	40	
12	柱穴 010	瓦質土器	椀	15.2	4.55			内：5YR6/6 橙色 ・10YR6/1 褐灰色 外：7.5YR7/2 明褐灰色 ・2.5YR6/6 橙色 断：2.5Y5/1 黄灰色	密	良	95	
13	柱穴 035	瓦質土器	椀	(4.8)				内：2.5Y7/1 灰白色 外：同上 断：同上	やや密（2mm 以下長石、1mm 以下褐色砂粒含む）	良	20	
14	柱穴 134	瓦質土器	椀	(13.0)				内：5Y5/1 灰色 外：同上 断：2.5Y7/1 灰白色	やや密（7mm の灰白色まだらの小石、1mm 以下の白色小石含む）	良	20	
15	井戸 050	瓦質土器	皿	(8.8)	1.5			内：5Y5/1 灰色・5Y4/1 灰色 外：同上 断：5Y8/1 灰白色	やや密（1mm 以下の白・灰色小石含む）	良	30	
16	井戸 050	土師器	皿	(8.4)				内：5YR6/6 橙色 外：同上 断：同上	粗（3mm の灰白色小石、2mm の白色小石、1mm 以下の白・灰色小石・微細な雲母含む）	良	20	

17	井戸050	土師器	皿	（10.2）	3.1		内：5YR6/6 橙色 外：同上 断：同上	やや密（2mm 以下の白・灰色小石、白・灰・褐色微細粒含む）	良	20
18	井戸050	瓦質土器	椀	（15.3）			内：5Y4/1 灰色 外：同上 断：5Y8/1 灰白色	やや密（2mm 以下長石、3mm 灰色小石粒含む）	良	20
19	柱穴073	土師器	皿	（15.4）			内：10YR6/2 灰黄褐色 ・10YR8/2 灰白色 外：10YR6/2 灰黄褐色 ・7.5YR7/4 にぶい橙色 断：7.5YR5/1 褐灰色 ・2.5YR7/6 橙色	密（2mm 以下灰色砂粒、雲母含む）	良	20
20	小土坑086-088	瓦質土器	椀	15.5	5.8	5.0	内：5Y4/1 灰色 外：同上 断：10YR6/3 にぶい黄橙色	密（微細な白砂少量含む、4mm 大の灰色小石含む）	良	60
21	小土坑086-088	瓦質土器	椀	（15.0）	5.1	（6.0）	内：5Y4/1 灰色 外：同上 断：2.5Y7/3 浅黄色	密（2mm 以下の灰・白色砂粒少量含む）	良	25
22	土坑90	瓦質土器	小皿	（9.0）	1.7		内：2.5Y6/1 黄灰色 外：同上 断：同上	密（微細な白砂粒含む）	良	30
23	小土坑107	瓦質土器	椀	（15.4）	5.3	5.15	内：N3/ 暗灰色 外：同上 断：5Y7/1 灰白色	密	良	25
24	焼土充填 青磁 土坑100		椀			4.8	内：5Y6/4 オリーブ黄色 ・5Y5/4 オリーブ色 外：同上（施釉） ・5Y7/2 灰白色（露胎） 断：N8/ 灰白色	密	良	50
25	焼土充填 土師器 土坑100		皿	7.7	1.5	6.0	内：5YR6/4 にぶい橙色 ・7.5YR6/3 にぶい褐色 外：同上	やや密（2mm 以下の長石・褐灰色砂粒・雲母含む）	良	100
26	焼土充填 土師器 土坑100		皿	7.8	1.7	6.3	内：5YR6/6 橙色 外：同上 断：同上	やや密（2mm 以下の長石・礫・雲母含む）	良	95
27	焼土充填 土師器 土坑100		皿	7.3	1.6	5.9	内：10YR6/2 灰黄褐色 外：同上 断：なし	密（1mm 以下の長石少量含む）	良	100
28	焼土充填 土師器 土坑100		皿	（7.7）	1.3	6.4	内：7.5YR7/6 橙色 ・7.5YR6/6 橙色 外：5YR7/6 橙色 断：同上	やや粗（4mm 灰色小石、1mm 以下長石・灰色砂粒・礫含む）	良	80
29	焼土充填 土師器 土坑100		皿	（7.7）	1.5		内：7.5YR5/2 灰褐色 外：同上 断：5YR4/6 赤褐色	密（1mm 以下の白砂粒含む）	良	50
30	焼土充填 土師器 土坑100		皿	7.3	1.4		内：10YR7/3 にぶい黄橙色 外：10YR8/3 浅黄橙色 断：10YR8/3 浅黄橙色 ・7.5YR7/4 にぶい橙色	やや密（1mm 以下長石・礫・雲母含む）	良	50
31	焼土充填 土師器 土坑100		皿	7.3	1.4	6.2	内：7.5YR7/4 にぶい橙色 ・10YR6/1 褐灰色 外：同上 断：7.5YR8/4 浅黄橙色	密（1mm 以下長石少量含む）	良	70
32	焼土充填 瓦質土器 土坑100		椀	12.5	2.95	4.0	内：N3/ 暗灰色 ・2.5Y8/1 灰白色 外：同上 断：2.5Y7/1 灰白色	やや密（2mm 以下長石含む）	やや不良	80
33	焼土充填 瓦質土器 土坑100		椀	11.0	2.8	3.4	内：2.5Y7/1 灰白色 ・5Y5/1 灰色 外：同上 断：2.5Y6/2 灰黄色	やや密（1mm 以下長石少量含む）	良	40
34	焼土充填 瓦質土器 土坑100		椀	11.2	3.1		内：N4/ 灰色 外：同上 断：2.5Y8/1 灰白色	やや粗（3~4mm 灰色小石粒、1mm 以下灰色砂粒含む）	良	95

35	焼土充填 土坑 100	瓦質土器	椀	12.0	3.3		内：2.5Y4/1 黄灰色　外：同上　断：7.5YR4/4 褐色	密（3mm 大の白砂粒、1mm 以下の白砂粒少し含む）	良	95
36	焼土充填 土坑 100	瓦質土器	椀	11.5	2.7	3.8	内：5Y5/1 灰色・2.5Y7/2 灰黄色　外：同上　断：5Y7/1 灰白色	粗（7mm 灰色小石粒、3mm 灰色小石粒、0.5mm 以下黒色砂粒含む）	良	80
37	焼土充填 土坑 100	瓦質土器	椀	11.1	3.0	4.6	内：10YR8/1 灰白色・5YR8/4 淡橙色　外：同上・5Y4/1 灰色　断：10YR8/2 灰白色	やや粗（3mm 灰色小石粒、やや 2mm 以下灰色砂粒・長石少量含む）	やや不良	90
38	焼土充填 土坑 100	瓦質土器	椀	11.2	2.7	4.0	内：2.5Y6/1 黄灰色　外：同上・2.5Y3/1 黒褐色　断：2.5Y6/1 黄灰色	やや粗（3mm 灰色小石粒、2mm 以下長石・黒色砂粒含む）	良	70
39	焼土充填 土坑 100	瓦質土器	椀	11.0	2.6	3.5	内：N4/ 灰色　外：同上　断：2.5Y8/2 灰白色	やや粗（3mm 以下長石少量含む）	良	80
40	焼土充填 土坑 100	瓦質土器	椀	10.9	2.9		内：10YR6/3 にぶい黄橙色　外：10YR8/2 灰白色・10YR5/2 灰黄褐色　断：10YR8/2 灰白色	やや粗（3mm 灰色小石粒、やや チャート、1mm 以下長石・石英含む）	やや不良	70
41	焼土充填 土坑 100	瓦質土器	椀	11.0	2.9		内：2.5Y6/1 黄灰色・2.5Y8/1 灰白色　外：7.5YR8/2 灰白色・2.5Y8/1 灰白色　断：2.5Y8/1 灰白色	やや密（1mm 以下灰色砂粒・長石含む）	良	50
42	焼土充填 土坑 100	瓦質土器	椀	10.4	2.6	5.1	内：2.5Y4/1 黄灰色・2.5Y8/1 灰白色　外：同上　断：10YR5/2 灰黄褐色	やや粗（3mm 以下長石少量含む）	良	60
43	焼土充填 土坑 100	瓦質土器	椀	11.4			内：N4/ 灰色・2.5Y7/1 灰白色・2.5Y8/2 灰白色　外：N4/ 灰色・2.5Y7/1 灰白色　断：2.5Y7/1 灰白色・2.5Y8/2 灰白色	やや粗（2mm 以下の長石・黒色砂粒含む）	良	40
44	焼土充填 土坑 100	瓦質土器	羽釜	20.0			内：N4/ 灰色　外：同上　断：5Y8/1 灰白色	粗（5mm 灰色小石粒、1mm 以下長石含む）	良	10
45	焼土充填 土坑 100	瓦質土器	甕	(29.4)			内：N3/ 暗灰色　外：同上・10YR4/1 褐灰色　断：10YR7/2 にぶい黄橙色	やや密（1mm 以下長石・雲母含む）	良	5
46	焼土充填 土坑 100	瓦質土器	鉢	27.9	12.75		内：10YR7/2 にぶい黄橙色・10YR5/1 褐灰色・5Y4/1 灰色　外：同上　断：10YR6/2 灰黄褐色	やや粗（8mm 以下の白・灰・淡褐色石・砂粒含む）	良	70
47	焼土充填 土坑 100	瓦質土器	鉢	27.8	10.8		内：2.5Y7/1 灰白色・2.5Y5/1 黄灰色・10YR5/2 灰黄褐色　外：5Y4/1 灰色・5YR5/4 にぶい赤褐色　断：2.5Y7/1 灰白色	密（2mm 以下の白色砂粒含む）	良	70
48	焼土充填 土坑 100	陶器	大甕	(37.2)			内：7.5YR6/1 褐灰色　外：7.5YR5/3 にぶい褐色　断：10YR6/2 灰黄褐色	密（7 ～ 8mm 大の白小石、微細な白砂粒含む）	良	15
49	焼土充填 土坑 100	瓦	丸瓦			幅 16.6	凸：10YR8/3 浅黄橙色　凹：同上・N3/ 暗灰色　断：10YR8/3 浅黄橙色	粗（3 ～ 8mm 灰色小石粒・長石、2mm 以下灰・黒・褐色砂粒・長石含む）	良	90
50	焼土充填 土坑 100	瓦	平瓦			器　厚 1.8 ～ 2.0	凸：10YR7/3 にぶい黄橙色　凹：10YR8/2 灰白色　断：2.5Y8/1 灰白色	粗（3 ～ 7mm 灰色小石粒、2mm 以下長石含む）	良	不明
51	不明遺構 122	土師器	皿	(7.5)	1.6		内：7.5YR7/4 にぶい橙色　外：同上　断：5YR7/4 にぶい橙色	やや粗（2mm 以下灰・黒・褐色砂粒、雲母含む）	良	50
52	不明遺構 122	瓦質土器	椀	(13.0)	3.35	3.1	内：N5/ 灰色　外：同上　断：5Y7/1 灰白色	やや密（2mm 以下灰色砂粒、長石含む）	良	40
53	不明遺構 122	瓦質土器	椀	(13.8)			内：2.5Y5/1 黄灰色　外：同上　断：2.5Y8/2 灰白色・2.5Y6/1 黄灰色	密（1.5mm 以下の白砂粒含む）	良	10
54	不明遺構 122	瓦質土器	鉢	(28.0)			内：5Y6/1 灰色・5Y7/1 灰色　外：同上　断：同上	やや密（2mm 以下長石、黒色砂粒含む）	良	10
55	不明遺構 122	瓦	平瓦？				凸：2.5Y5/1 黄灰色・2.5Y7/1 灰白色　凹：同上　断：同上	やや粗（3mm 白色小石粒、2mm 以下褐色・白色砂粒、礫含む）	良	不明
56	不明遺構 122	瓦	平瓦？				凸：2.5Y4/1 黄灰色　凹：10YR7/3 にぶい黄橙色　断：同上	粗（3 ～ 10mm 白・灰色小石粒、2mm 以下長石含む）	良	不明

図　　版

図版一

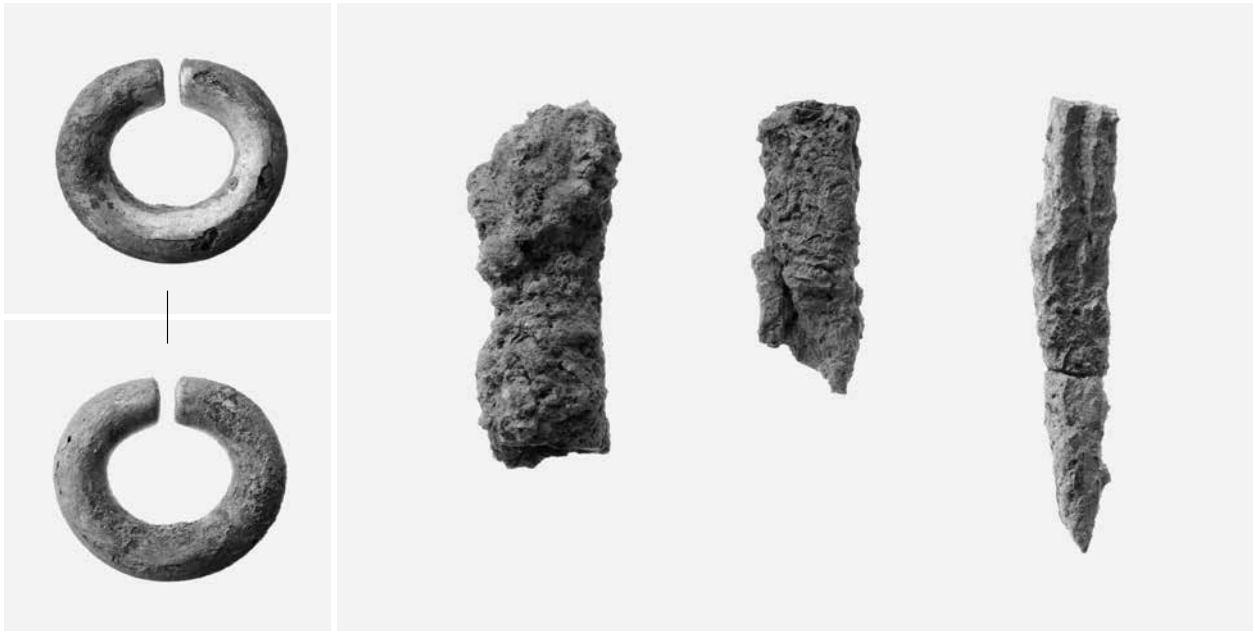
令和元年度 No.27調査区

a．No.27 石室検出状況
（北から）

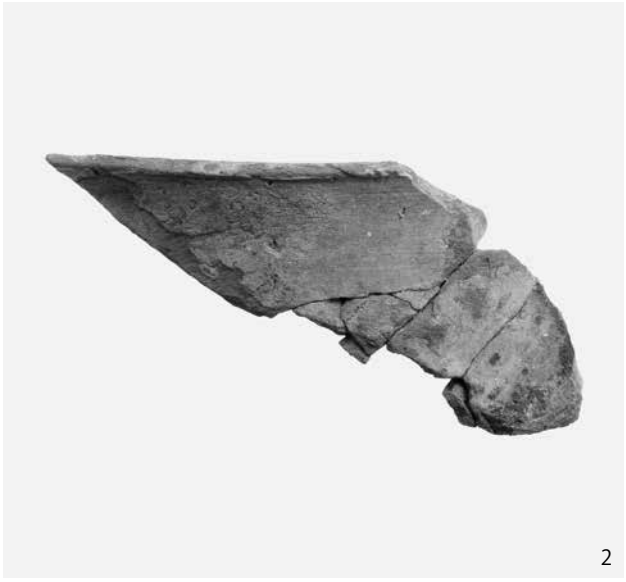
b. No.27 石室検出状況
（東から）

c. 石室内遺物出土状況

図版二　No.27石室出土遺物、No.1・26出土遺物



1



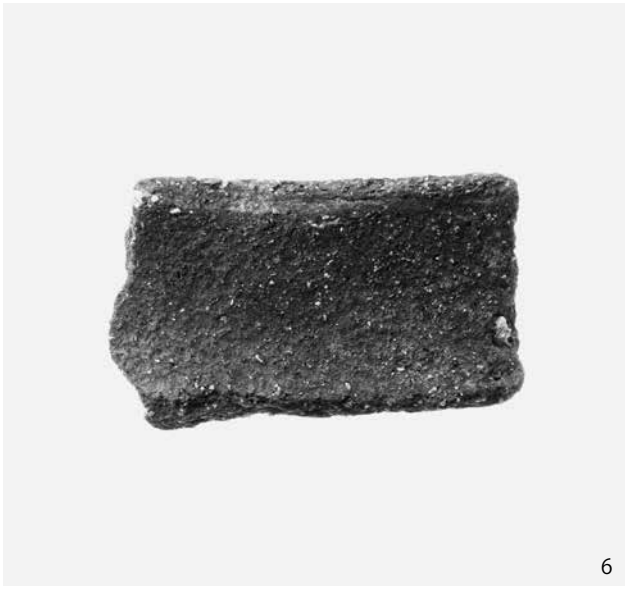
2

3

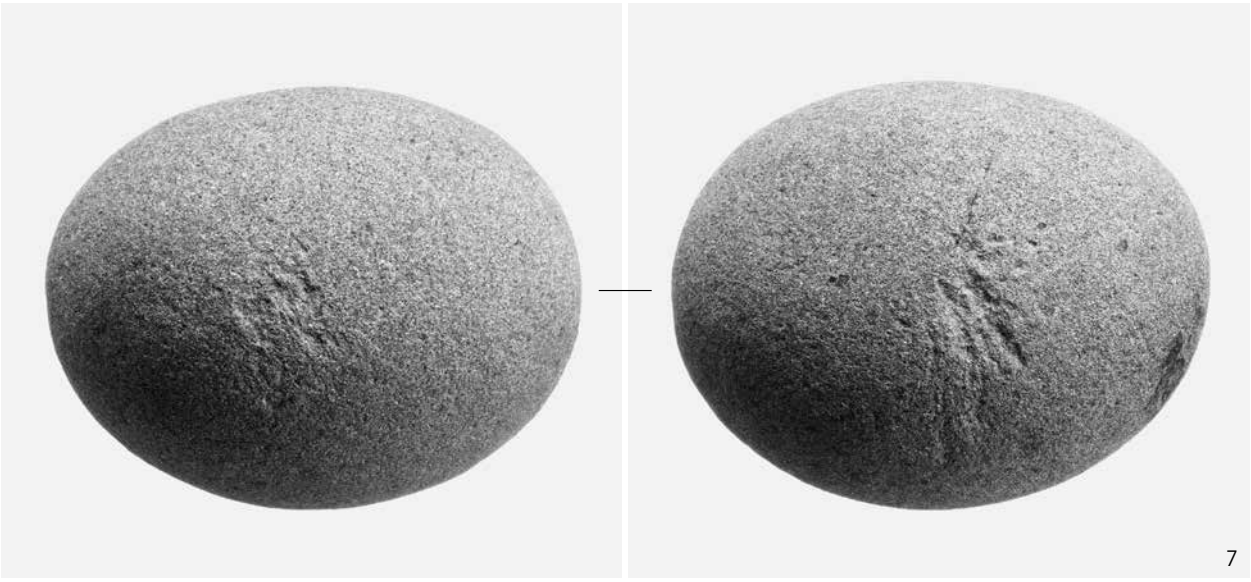
4

No.22・23・26出土遺物

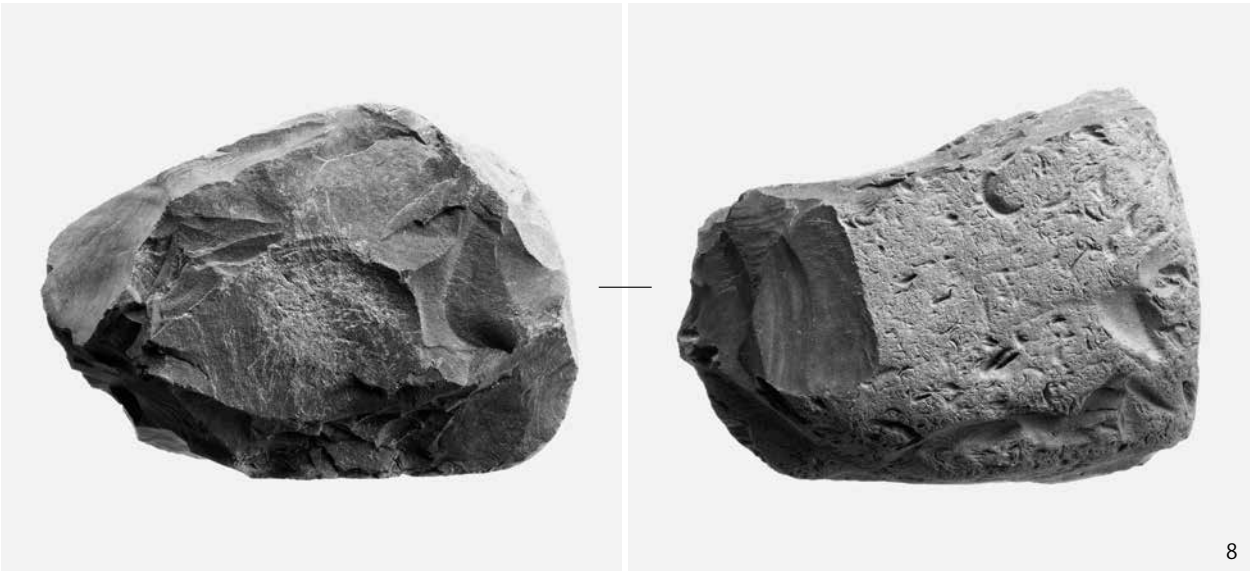
5



6



7



8

図版四　全景・壁面

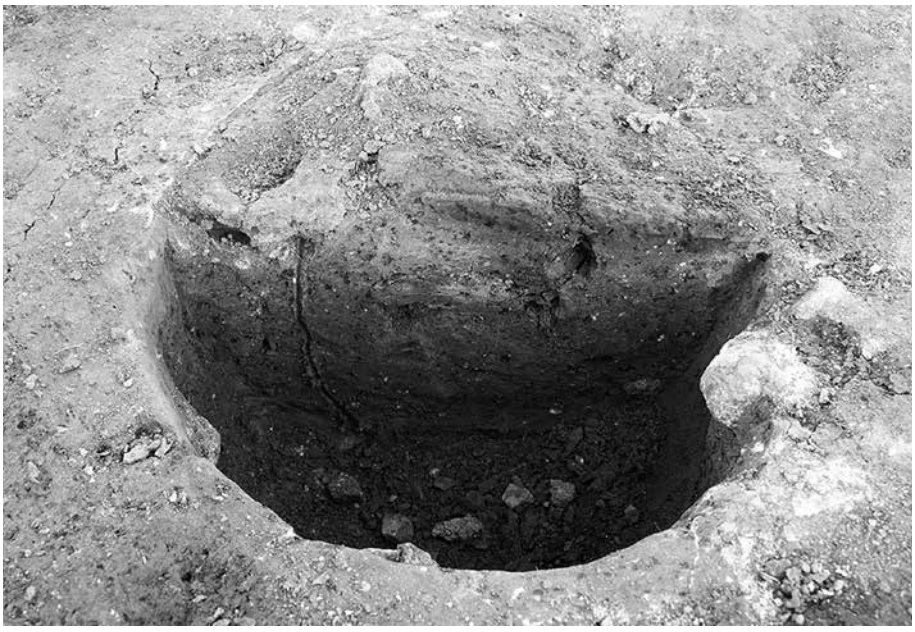
遺跡遠景（西から）

西野々遺跡全景（南から）

北壁断面

図版五　掘立柱建物〇一・〇二

掘立柱建物 01（南から）



柱穴 004（南から）

掘立柱建物 02（西から）

図版六　掘立柱建物〇二・〇三

柱穴 018（南から）

掘立柱建物 03（南から）

柱穴 051（南から）

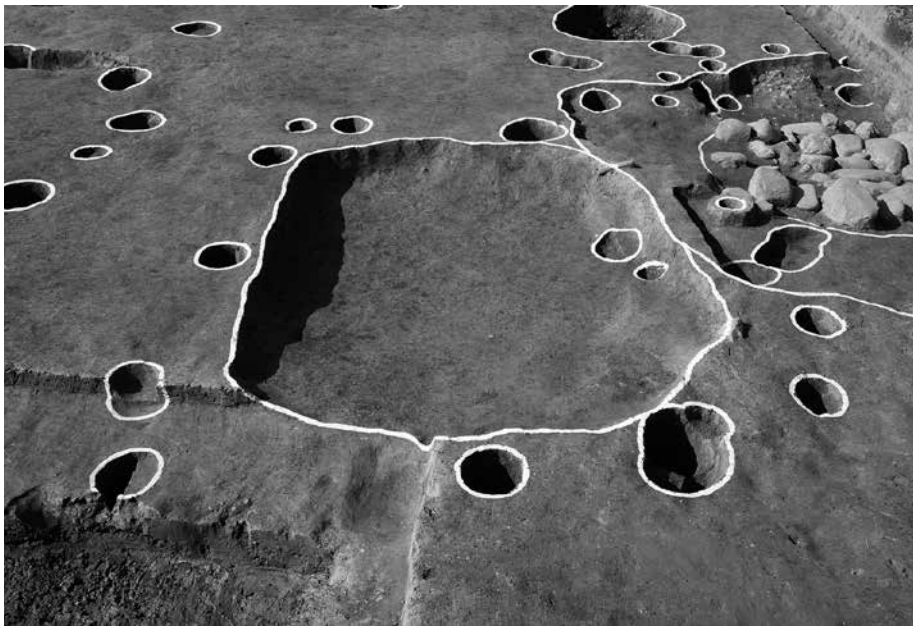
井戸 050（南から）

掘立柱建物 04（東から）

柱穴 073（南から）

図版八　焼土充填土坑一〇〇その1

小土坑 088・087・086
（北東から）



焼土充填土坑 100（東から）

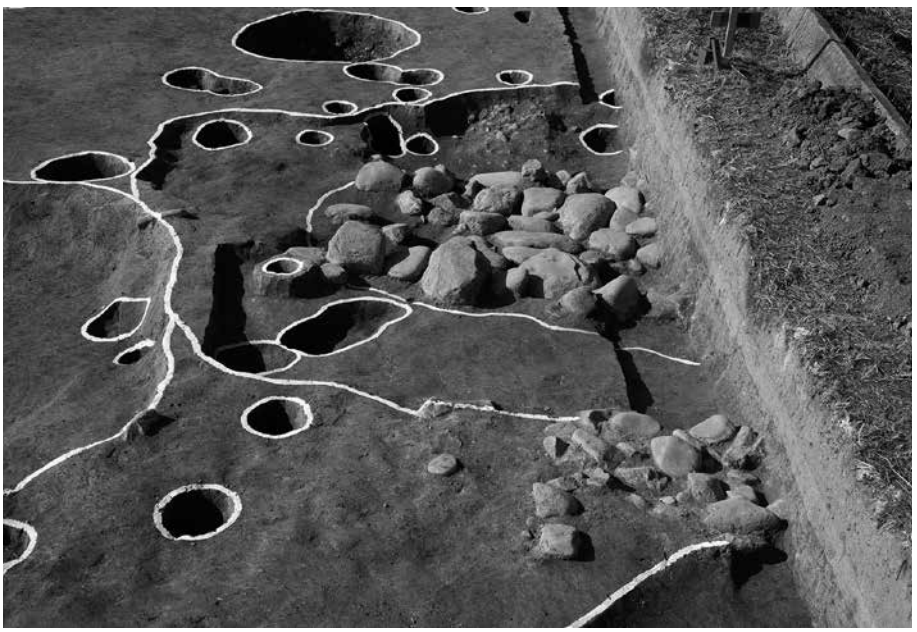
焼土充填土坑 100
断面・遺物出土状況（南から）

図版九

焼土充填土坑一〇〇その2・不明遺構一二二

焼土充填土坑 100
瓦質土器椀・鉢出土状況
（南から）

焼土充填土坑 100
瓦出土状況（西から）



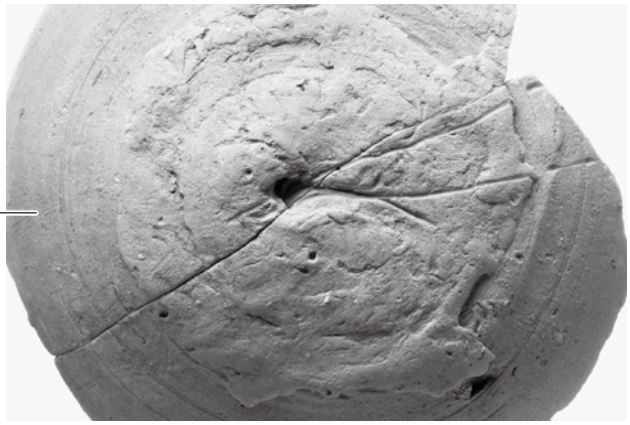
不明遺構 122（東から）

図版一〇　第4層出土遺物

1

6
5
4
3
2

8



7

10

9

11

第 4 層出土遺物

12

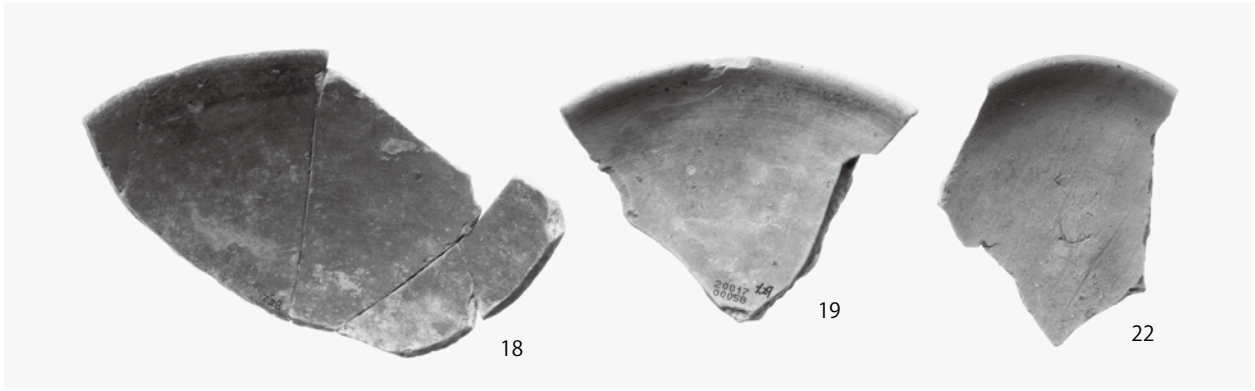
20

21

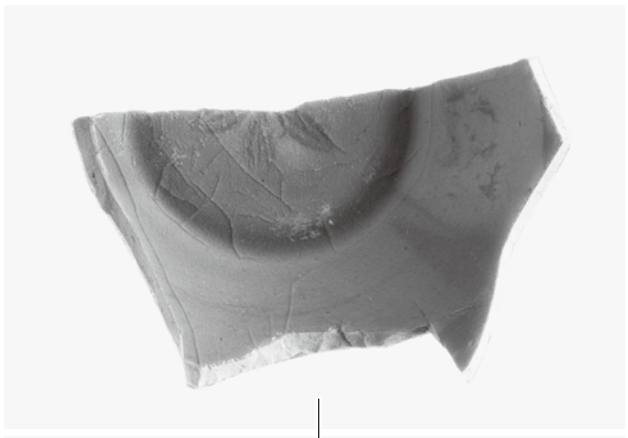
23

柱穴・土坑出土瓦器椀

図版一二　遺構出土遺物・焼土充填土坑一〇〇出土遺物その1



井戸・柱穴・土坑出土遺物



焼土充填土坑 100 出土遺物

図版一三　焼土充填土坑一〇〇出土遺物その2

34

32

37

35

38

36

41

39

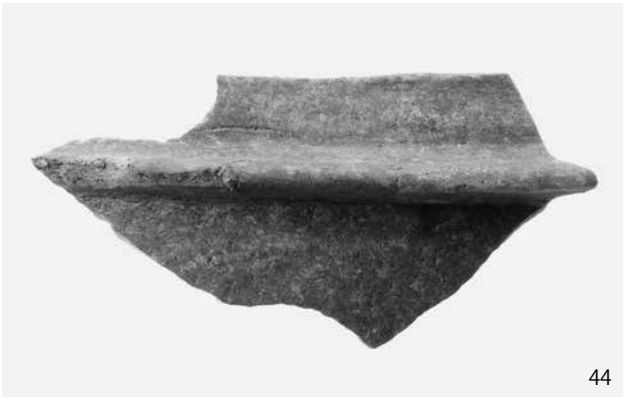
40

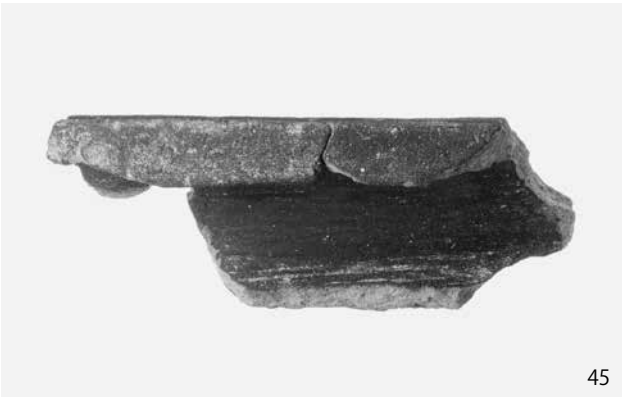
43

42

33

図版一四　焼土充填土坑一〇〇出土遺物その3


44


45

46

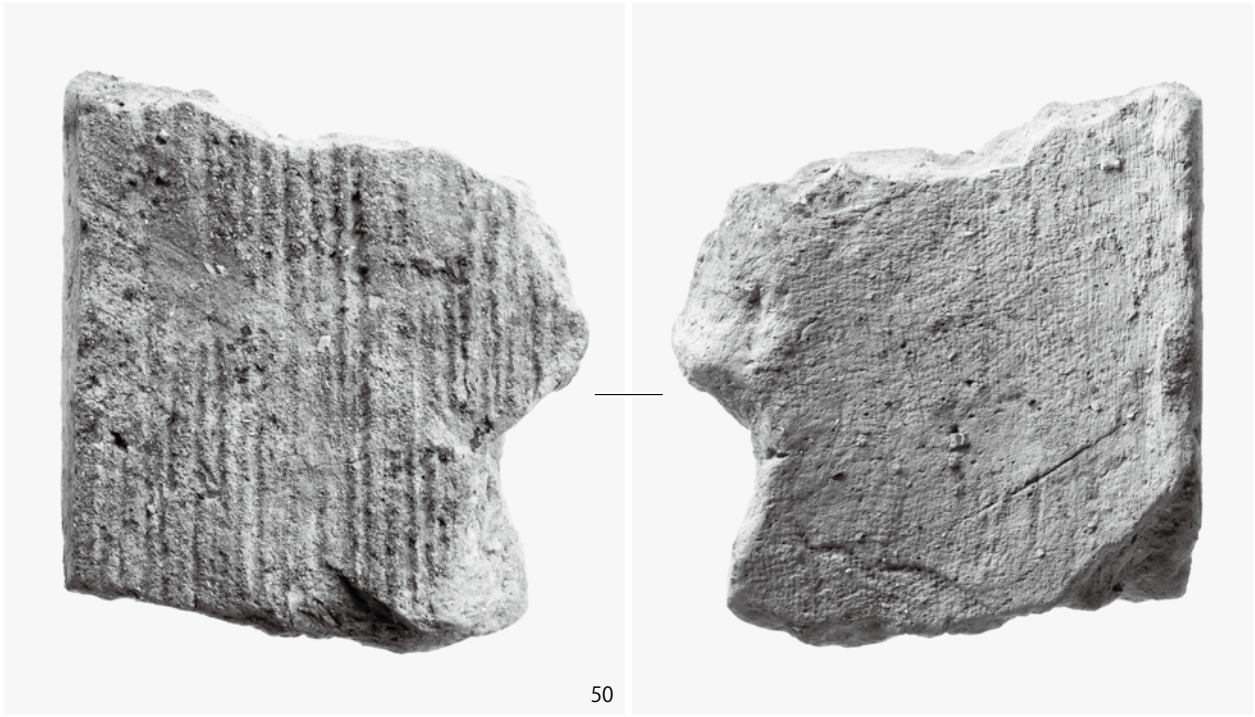
47

図版一五　焼土充填土坑一〇〇出土遺物その4

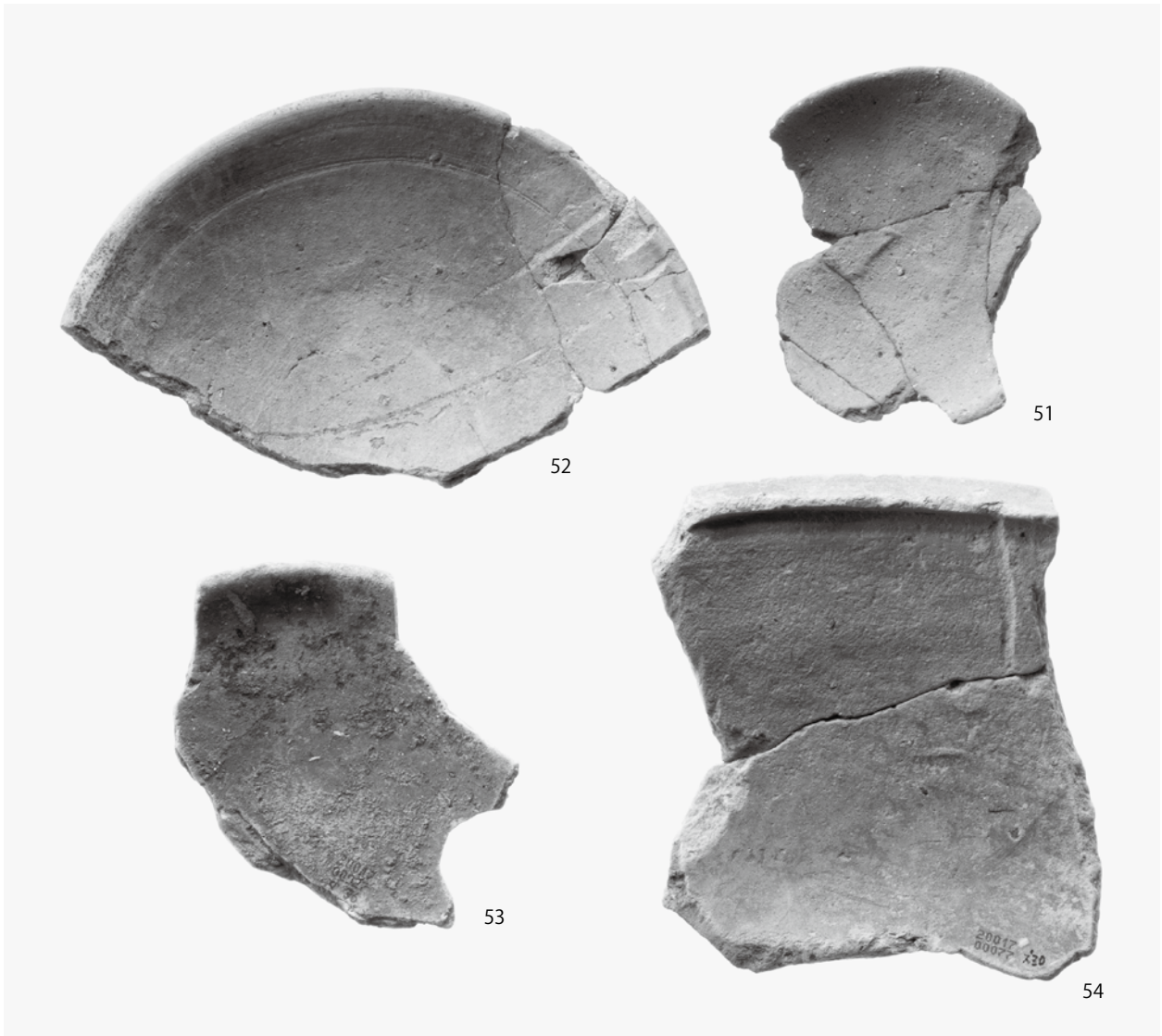
48

49

図版一六　焼土充填土坑一〇〇出土遺物その5・不明遺構一二二出土遺物その1



焼土充填土坑 100 出土瓦



不明遺構 122 出土遺物

図版一七　不明遺構一三二出土遺物その2

55

56

報告書抄録

ふりがな	にしののこふんぐん・げしいせき・にしののいせきはっくつちょうさがいよう
書名	西野々古墳群・外子遺跡・西野々遺跡発掘調査概要
副書名	府営農村総合整備事業「伏見堂地区」に伴う試掘・確認・発掘調査
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大澤嶺（編著）・木村啓章
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前二丁目　TEL 06-6941-0351
発行年月日	2022年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
西野々古墳群（にしののこふんぐん）	大阪府（おおさかふ） 富田林市（とんだばやしし） 伏見堂（ふしみどう）	27214	130	34° 28' 19"	135° 35' 04"	20200118 ～ 20200319	130	府営農村総合整備事業「伏見堂地区」
外子遺跡（げしいせき）	大阪府（おおさかふ） 富田林市（とんだばやしし） 伏見堂（ふしみどう）・横山（よこやま）	27214	129	34° 28' 02"	135° 35' 00"	20200118 ～ 20210226	100	府営農村総合整備事業「伏見堂地区」
西野々遺跡（にしののいせき）	大阪府（おおさかふ） 富田林市（とんだばやしし） 伏見堂（ふしみどう）	27214	110	34° 28' 22"	135° 35' 09"	20201030 ～ 20201204	190	府営農村総合整備事業「伏見堂地区」

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西野々古墳群	古墳	古墳時代 中世	周溝・柱穴・溝	土師器・瓦器	
外子遺跡	集落跡など	縄文 古墳時代 中世	石室・土坑	縄文土器・石器・須恵器・土師器・瓦器	
西野々遺跡	集落跡など	中世	掘立柱建物・井戸・土坑	土師器・瓦器・青磁・瓦	

要約	西野々古墳群では２号墳の周辺で溝を検出した。 外子遺跡では削平された古墳の石室を検出した。出土した須恵器から７世紀半ばの古墳と考えられる。 西野々遺跡では中世に属する複数の掘立柱建物や井戸、土坑を検出した。遺構から土師器皿や瓦器椀のほか、青磁や瓦が出土していることから有力者の居住域であることが推測される。

西野々古墳群・外子遺跡・
西野々遺跡発掘調査概要
－府営農村総合整備事業「伏見堂地区」に伴う試掘・確認・発掘調査－

発　行　　大阪府教育委員会
〒540－8571　大阪市中央区大手前二丁目
TEL 06－6941－0351（代表）

発行日　令和４年３月31日

印　刷　株式会社　近畿印刷センター
〒582－0001　柏原市本郷５丁目６番25号